

2023 年度

大学生の視点を生かした農山村集落活性化と 郵便局との連携可能性に関する調査報告書(2)

—福島県西会津町奥川地区を事例に—



2024 年 2 月 29 日

福島大学行政政策学類

岩崎専門演習

は し が き

本報告書は、2023 年度に実施した福島県西会津町奥川地区でのフィールドワークの成果をまとめたものです。

福島大学岩崎ゼミでは、2021 年度に一般社団法人通信研究会よりご支援をいただき、「大学生の視点を生かした農山村集落活性化と郵便局との連携可能性」をテーマとして、西会津町奥川地区にて調査を実施いたしました。調査内容としては、奥川郵便局への来店者や局員の方々に加え、近年増加している地域おこし協力隊員へのインタビューを行いました。その結果をふまえ、地域住民と外部人材、関係人口との「架け橋」として、過疎地域の郵便局は大きな役割を果たすことができるのではないかという提案を行いました。

2023 年度においては、提案した内容の実証実験を主たる目的として調査を実施することとしました。地域に集う様々な人々の「架け橋」としての郵便局の可能性を検討するために、9 月に来店者インタビューを実施した後、地域情報をまとめた「奥川新聞」を作成し、続いて 11 月に学生の企画による「孫カフェ」を実施しました。加えて、奥川地区で実施している祭礼や人足体験にも参加し、住民が主体となった地域づくりの現場を学んでまいりました。

いずれの場面でも、奥川郵便局の皆様をはじめ、地区の皆様は学生を温かく迎えてくださり、貴重なお話を聞かせてくださいました。

何度か奥川地区に入る中で、学生たちは多くの地域の宝物と出会いました。例えば、登山客に人気のある美しい山々、貴重な歴史的建造物、住民が代々守ってきた祭礼、農家が手をかけて育てた農産物、古民家を生かしたモダンな宿泊施設、蔵をリニューアルした小さな美術館、美しいシャッターアート、年齢を重ねても地域づくりに前向きな住民の方々。それらは他に代えがたい地域の魅力であり、それに惹かれて多くの関係人口が奥川地区に集まっています。これらの宝物を積極的に発信することで、豊かな交流と地域の活力が生まれるのではないかと、その拠点の一つとして郵便局が力を発揮することで、地域の持続可能性がより高まるのではないかと、学生たちはそのような思いをもつようになりました。それへの期待がこの報告書には込められています。

今回の現地調査にあたっては、奥川郵便局長の小林新也様、局員の皆様、前局長の矢部哲也様、西会津町役場奥川支所長齋藤俊一郎様、集落支援員岩橋義平様、地域おこし協力隊員渡辺貴洋様から多大なるご支援・ご協力をいただきました。心より感謝を申し上げ、今後ともいっそうのご教示をお願い申し上げる次第です。

福島大学行政政策学類教授
岩崎 由美子

目 次

第1章 調査の目的と概要	1
第1節 調査の背景と目的	1
第2節 今年度の研究・調査内容	2
第3節 調査地の概要	3
第4節 郵便局による地方創生の取り組みに関する先行事例の整理	7
第2章 奥川郵便局聞き取り調査結果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 聞き取り調査結果	12
第3章 コミュニティ・カフェ実証実験結果	24
第1節 実証実験の目的	24
第2節 実証実験の記録	26
第3節 実証実験を行った感想と考察	33
第4節 活動の反省点と今後に向けた課題	44
第4章 調査のまとめと提言～過疎地域郵便局のもつ可能性	48
第1節 「生活支援活動」（生活面での課題解決）に向けて	48
第2節 「コミュニティ支援活動」（集落での課題解決）に向けて	59
第3節 「価値創造活動」（地域づくり・地域活性化）に向けて	72
第4節 むすびにかえてーボトムアップ型地域づくり拠点としての郵便局への期待	79
附属資料 「福西地区エリアマネージャー情報」（2023年度 第8号）	83

第1章 調査の目的と概要

第1節 調査の背景と目的

農山村地域では過疎化と高齢化が進行し、頻発する自然災害や基盤の未整備による維持管理の困難さ等もあって、地域資源管理主体としての役割を果たせなくなりつつある集落が増加している。農業従事者の減少により、農業を通じて行われてきた集落共同活動が弱体化しており、地域内で十分な人材を確保することが困難な状況に陥っている。

こうした状況をふまえ近年、地域内で不足する人材を補完するために、地域外の多様な主体との連携が行われる例が多くみられる。集落支援員や地域おこし協力隊等の地域サポート人材をはじめとして、ボランティア団体やNPO、企業、大学との連携事例も増加している。

そのような中、過疎地域における郵便局は、地域住民同士の交流の場としても重要な存在であり、建物自体が集いの拠点としての役割を担っていける可能性がある。事実、こうした拠点機能を生かし、地域情報の発信や住民と移住者の交流の場の提供、高齢者の健康づくりや買い物支援等に関わる郵便局も近年増えつつあり、過疎地域の郵便局の有する機能に注目が集まっている。

本研究では、地域住民の暮らしの質を確保しつつ、学生や外部サポート人材、移住者等の参画による農山村活性化のあり方を実践的に追究するとともに、こうした取り組みにおいて期待される郵便局の役割と連携可能性について検討を加えることを目的とする。

今年度調査では、2021年度「大学生の視点を生かした農山村集落活性化と郵便局との連携可能性に関する調査報告書—福島県西会津町奥川地区を事例に一」（以下、「2021年度報告書」とする）で提言した内容に基づき、地元住民への聞き取り調査を継続的に行うことに加え、郵便局を拠点とした地域交流活動の実証実験を行うことを主たる目的とした。

2021年度調査報告書では、地域住民、地域おこし協力隊それぞれの視点から見た地域の課題と、それに対して郵便局ができる解決策を検討した結果、住民の生活インフラを支える役割に加え、外部人材と住民をつなぐ「架け橋」としての役割を提起した。郵便局が両者の「架け橋」となることで、地域おこし協力隊等の活動を通じた地域活性化を推進し、また、移住者や関係人口の増加は、地域住民の生活の質の向上にもつながると考えたためである。今後奥川地区で考えられる具体的な取り組みとして、下記の3点を提言としてまとめた（図表1）。

図表 1 2021 年度報告書での主な提言内容

- ①高齢者支援の場→郵便局の空きスペースを利用した「むらの保健室」
- ・日頃の健康管理や保健師との相談活動等
 - ・医大生を招いて大学生との交流活動と健康管理活動を合わせて実施
- ②住民同士の交流の場→郵便局を拠点とした地域情報の発信、交流
- ・大学生が「奥川新聞」を作成し、郵便局の室内に掲載し、利用者に配布
- 奥川地区でこれまで取り組んできた地域づくり活動やイベントの思い出、住民の小さな取り組みや生きがい活動の掲載、奥川地域づくり協議会の活動紹介など
- 大学生によるカフェの運営、多世代交流
- ③地域おこし協力隊等の外部人材と地域住民をつなぐ場
- ・地域おこし協力隊を講師としたワークショップ・講座
- 出ヶ原和紙を使った絵はがき教室（切手を貼ってその場で投函）
- 都会の子供や孫に送る米の袋に奥川の絵を描いてオリジナルの米袋を作る
- 奥川おすすめ観光情報の動画・パンフレット（風景印収集家など向け）

第 2 節 今年度の研究・調査内容

上記の提言をふまえて学生および現地と打ち合わせを行い、今年度は下記の 7 点の研究・調査活動を実施することとした。

①郵便局と地方創生に関する事例収集、文献調査（2023 年 5～6 月）

地域でのフィールドワークを行う前に、過疎地域等における地方創生と郵便局の役割について各地の事例を収集し、特徴的な取り組みを把握した（詳細は後掲の第 4 節を参照）。

②西会津町役場、奥川支所でのレクチャー、インタビュー調査（2023 年 6 月、8 月、9 月）

西会津町役場および支所の取り組みを、役場職員、集落支援員、地域おこし協力隊の方々への聞き取りにより把握した。

③郵便局来店者・郵便局員へのインタビュー調査（2023 年 9 月）

郵便局の来店者への聞き取り調査を実施し、地域生活の概況・課題に加え、郵便局の利用頻度や利用実態を把握した。加えて、郵便局員の方にも、聞き取り調査を実施した。

④奥川地区のイベントへの参加と参与観察（2023 年 7 月、8 月、9 月）

奥川地区で実施された 7 月の人足体験ツアー、8 月の極入大聖歓喜天祭礼、9 月の出戸岩屋祭りに参加して、住民との交流を深めながら参与観察を行った。

⑤地域広報紙「奥川新聞」の作成、配布（2023 年 11 月）

今年度の活動を地域に広く周知することを目的に、郵便局での調査活動や地区の地域おこし活動を学生が取材して「奥川新聞」を作成し、下記の「孫カフェ」実施の際に郵便局窓口で配布を行った。好評のため後に増刷し、地区内全戸で回覧をしていただいた。



⑥「孫カフェ de おくが輪郵便局」の実証実験（2023 年 11 月）

郵便局を拠点とした新たなコミュニティ形成の可能性を実践的に追究するため、学生と住民によるコミュニティ・カフェの実証実験を行い、こうした取り組みにおいて期待される郵便局の役割と可能性について検討を加えた。

⑦報告書のとりまとめ（2024 年 2 月）

過疎地域郵便局に期待される役割を中心に、上記の活動内容を本報告書にまとめ、農山村集落の持続可能性を高めるための取り組みと、そこで期待される郵便局の役割や可能性について、学生の視点から提言を行った。

第 3 節 調査地の概要

以下では、今回調査を行った西会津町および奥川地区の概要を簡単に述べる（2021 年度報告書にも詳細が記載されているので参照されたい）。

①西会津町の概要

福島県西会津町は、県西北部の新潟県境に位置し（図表 2）、飯豊連峰等 1,000m 級の山岳に囲まれ、山林が 86%を占める山間地域である。町の人口は 5,325 人、高齢化率は 49.5%（福島県推計人口・2023 年 8 月 1 日現在）で、県内でも 5 本の指に入る高齢化自治体である。人口は 1965 年以降一貫して減少を続けており、65 歳以上の人口数の割合がきわめて高い。高齢化の進展は町内の旧村間で異なり、町中心部の野沢地区の高齢化率は 36.7%である

が、中心部から最も遠い奥川地区の高齢化率は 62.8%にのぼる（町役場資料）。



図表 2 西会津町の位置（町役場ホームページより）

「西会津町総合計画（第4次）後期基本計画」では、令和5年度～7年度の期間中に特に重点を置いて進めていく10のプロジェクトとして「プロジェクトX(10)」を掲げている。具体的な内容は以下の図表3のとおりである。

図表 3 西会津町後期基本計画における「プロジェクトX(10)」

- | |
|--|
| <p>I. <u>幼児教育の推進</u>～保小中連携教育カリキュラムを作成・実践し、子どもたちを健やかに育むための幼児教育を、保護者・地域・こども園・学校が連携を図り推進。</p> <p>II. <u>産官学民連携教育の推進</u>～「産業(企業)」「官公庁(国・地方公共団体)」「学校(大学・研究機関)」「民間(地域住民)」が連携し、人・物・文化・自然などを生かした教育を引続き進める。</p> <p>III. <u>担い手の確保と育成</u>～町農林業の3本柱である「ミネラル野菜」「米」「菌床キノコ」の生産体制の維持・発展に対応した支援を行い、担い手の確保と育成を進める。</p> <p>IV. <u>有害鳥獣対策の推進</u>～「自分の農地は自分で守る」を基本として、住民主体の取り組みを支援すると共に、行政・地域・関係団体が一体となった、複合的な有害鳥獣対策を強力に進める。</p> <p>V. <u>「日本の田舎、西会津町。」ブランド力強化</u>～「日本の田舎、西会津町。」のブランド力を強化し、さらなる町の魅力発信に取り組み、町の認知度アップ、地場製品の競争力向上など幅広い分野への波及効果を目指す。</p> <p>VI. <u>移住定住環境の整備</u>～移住定住の基盤となる住まいの確保のほか、リモートワークやワーケーション、複業など新たな働き方のニーズに対応できる環境整備を進める。</p> <p>VII. <u>健康コミュニティづくりの推進</u>～健康寿命のさらなる延伸により、町民一人ひとりの幸せな暮らしを実現するため、健康増進計画（第2期）に基づき、「からだ」「こころ」「つ</p> |
|--|

ながり」による「さすけねえわ（輪）」の健康づくりを進める。

VIII. 高齢者の生きがい対策～地域のサロン活動や趣味活動の支援、世代間交流、就労の場の確保を図り、高齢者が生きがいを持って「いきいき暮らせる」まちづくりを関係機関と連携し進める。

IX. デジタル変革の促進～デジタル技術を戦略的に活用し、地域課題の解決や行政サービスの向上、移住定住の促進などを図るため、産業、暮らし、行政などあらゆる分野でデジタル変革（デジタル・トランスフォーメーション）を推進する。

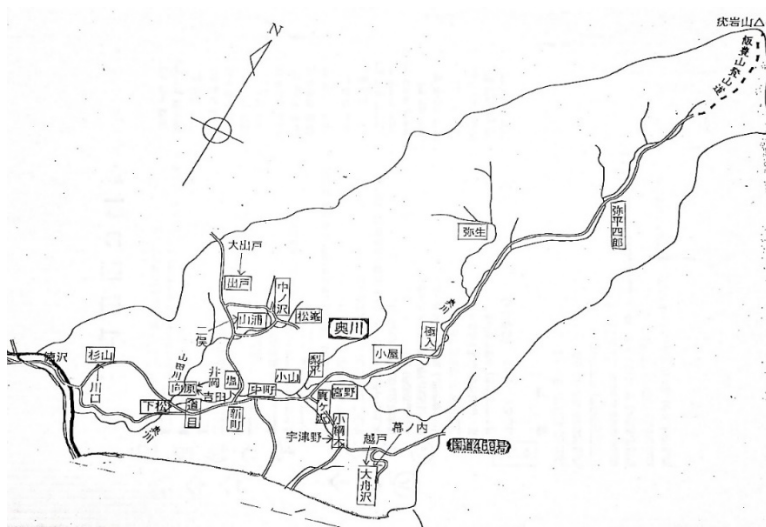
X. 野沢まちなかの再生～公共施設の集約や歩いて暮らせるまちづくり、商店街の活性化、観光誘客など総合的な視点から、野沢まちなかの将来像の検討を行い、特に旧役場庁舎跡地など区域内の資産の再生・利活用の検討と官民連携による持続可能な運営体制づくりに取り組む。

（西会津町総合計画（第4次）後期基本計画より引用）

このように、教育や健康づくりのような地域生活面に関わる政策から、地域ブランド、担い手育成や鳥獣害対策といった産業支援まで重点項目は多岐にわたるが、双方に通底する試みとして近年力を入れているのが、「デジタル変革」の取り組みである（詳細は第4章第1節で後述する）。

②奥川地区の概要

奥川地区は、西会津町の北部に位置し、21 からなる集落により形成されている（図表4）。そのほとんどで高齢化率が50%を超えている。2011年度から集落支援員が配置され、特に高齢化率が高く集落機能の維持が困難な集落への訪問活動や相談業務等を担当している。2014年度からは町単独事業として「西会津町活力ある地域づくり支援事業」が設置され、地域活動への支援を行うほか、西会津ケーブルテレビによる情報提供、交通弱者へのデマンドバスによる送迎、サロンの開催等も行われている。



図表4 奥川地区集落地図

(町役場資料)

奥川地区のもう一つの特徴として、大学生との域学連携活動に積極的に取り組んでいるという点が挙げられる。地区内に空き家を活用したボランティア拠点が整備され、高齢化が進んで共同作業や活動の運営が困難になっている地域に、大学生等外部人材がボランティアとして参加できるような集落支援の仕組みを作っている。



当ゼミでも、各種交流イベントへの参加のほか、住民への聞き取り調査や、地区内の産業遺産の見学を行うなどして集落活性化のための具体的な提案を学生が行い、「一日孫体験」、屋号看板の提案、「集落魅力マップ」の作成、住民の生活史の聞き書き集の作成等に取り組んできた。



第4節 郵便局による地方創生の取り組みに関する先行事例の整理

本節では、郵便局による地方創生の取り組みについて収集した事例をとりあげ、特徴的な事例について紹介したい。大きく、健康福祉、生活支援分野と地域活性化分野に類別し（図表5）、とくに奥川地区のような過疎地域において展開可能性のある取り組みを取り上げて整理する。

図表5 事例からみる郵便局による地方創生の取り組み

番号	分野	活動テーマ	事例
1	健康福祉、生活支援分野	郵便局のみまもりサービス	有償サービスとして全国で事業展開
2		地域住民の健康づくり（まちの保健室）	島根県雲南市、沖縄県名護市など
3		地域住民の趣味の教室や集う場づくり	山口県周防大島町（健康麻雀教室）
4		お店や宅配などの買い物支援	新潟県津南町、秋田県五城目町など
5		行政手続き代行サービス（住民票の写しや納税証明書等）	福島県二本松市、長野県泰阜村など多数
6	地域活性化分野	道の駅等への農産物の移送・出荷支援	静岡県藤枝市
7		地域農産物や特産品の販促活動	福島県二本松市など
8		移住希望者・関係人口への情報発信	石川県（郵便局長移住サポーター制度）

(1)郵便局のみまもりサービス

全国各地の郵便局で行われているみまもりサービスである。家族と離れて住んでいる一人暮らしの高齢者などに対して、近くの郵便局員が会いに行き、お話をし、写真と共に様子を伝える。直接会うことで分かる顔色の良しあしや会話の受け答えなど些細な変化に気づくことができるのが強みである。サービスの流れとしては、①「月1回郵便局員が30分程度訪問する」、②「計10項目の質問を実施する」、③「利用者の生活状況を写真付きの報告書でご家族などの指定先へと報告する」というものである（注1）。

次に、空き家のみまもりサービスは、対象物件の状況を郵便局社員が定期的に確認し、外回りの状況や戸締まり等を確認し、物件の様子を写真付きの報告書で連絡するというものである。訪問回数は年12回、年4回、年2回から選べ、原則日本全国どこでも利用できるサービスである。3つのオプションサービスとして、「通風・通水サービス」、「災害後見回りサービス」、「郵便受箱投函物の片付け・送付サービス」も準備されている。

高齢者のみまもりサービスは、西会津町奥川郵便局でも既に実施実績がある。2021年度報告書では、この取り組みをさらに発展させる方向として、従来のみまもりサービスにオンラインを導入して、住民と子ども・孫たちが同時双方向に交流できるようなサービスの提供も可能なのではないかという提言を行った。高齢の地域住民は、パソコンや端末の操作に慣れていない方が多いと思われるが、そこは郵便局員が端末の貸出や操作のサポートを行う。それによりみまもりサービスがリアルタイムな映像として届けられ、顧客の満足度の向上も図れるように思われる。

(2)防災・観光情報の発信

郵便局と地方創生に関する取り組みとして防災・観光情報の発信がある。その一つに、市内にある郵便ポストにQRコードを表示したステッカーを貼付するというものがある。このQRコードを読み取ると災害時の避難先などの防災情報や市内の観光情報を閲覧することができる。トイレや駐車場、病院についてなど掲載している情報の中身は市町村によって異なるが、例えば、福岡県太宰府市や岩手県遠野市、香川県坂出市などいくつかの市町村で実施されている。地域住民や市外からの観光客が情報を入手する際に役立つと考えられる。

実際にこの取り組みを行っている太宰府市の市長は、「新たな試みで、安全安心な暮らしの実現のほか、太宰府観光に訪れる地元外の方々にも役立つと思う」と話している（注2）。また、坂出市の市長は「これからの市民や地域のために、郵便局のネットワークを活用させてもらいたい」としている（注3）。

この取り組みを西会津町で行うことができるか考えていく。ポストは西会津町にいくつかあると思うので、QRコードを表示したステッカーを設置する場所は確保できる。また、実際にこの取り組みをしている坂出市では、ポストだけでなく、市内の宿泊施設や飲食店にもステッカーの設置を依頼しているとあった。西会津町でもポストが近くにない場所では、宿泊施設や飲食店などステッカーを設置できそうな場所に依頼して貼ってもらうこともできる。

そして、西会津町は高齢者の方も多く、スマートフォンを持っていない方や扱いに慣れていない方もいると思う。そのため、QRコードだけでなく、防災マップや観光マップをパンフレットにして配布することもできたら良いと考える。

また、奥川地区にはツーリングで訪れる方が多いと伺った。ツーリングで訪れた方にQRコードの存在を知ってもらえるように、まず住民の方に広めることや目につきやすいよう

に大きくするなど工夫が必要である。

この取り組みのためには情報をまとめることや設置にかかる費用が問題となる。総務省のアンケート結果によると、すでに郵便ポストの活用を行っている自治体の半数以上（約56%）が一部又は全部の費用を負担している（郵政行政部郵便課、2023年10月23日）。財政面やQRコード設置に関する情報提供などの取り組みを推奨する支援がされると良い。

(3) 移住希望者・関係人口への発信

ここでは、「移住希望者・関係人口への発信」に関する先行事例として、石川県の「郵便局長移住サポーター制度」(注4)について紹介する。この制度は、2015年に「移住・定住人口確保に関する協定」を石川県と日本郵便北陸支社が結び、移住・定住者への支援を目的につくられた。具体的には、地元の郵便局長が「移住サポーター」として、地域への移住を検討する人々に移住先の情報提供やサポートを行うという制度である。地域の魅力や生活環境に関する情報なども提供し、新しい住民が円滑に移住できるように協力することで、観光振興や交流人口の拡大、地域の活性化の実現を目指すという取り組みである（郵便局長会・北陸地方会・石川県 北加賀地区会・吉野郵便局 小林宏至局長 2018）。

石川県が運営している、石川県へのUIターンや移住希望者向けのポータルサイト「いしかわ暮らし情報ひろば」では、「郵便局長移住サポーターによるおすすめ地域情報」、「郵便局長移住サポートマップ」として、各地域の郵便局長が地域の魅力や暮らしの様子などを紹介している。

移住希望者・関係人口への発信やサポートなどの移住支援制度は、主に自治体が主導して、企業と連携しながら展開されることが多いが、石川県のように郵便局と県が連携してサポートを行う事例はあまりない。しかし、これから「郵便局長サポーター制度」やこれをモデルとした制度が他の自治体でも導入されるのではないかと考える。具体的に、この制度がどこまでの効果があったのか、どの程度利用されたのかは明らかになっていない。しかし、各地域の郵便局がこうした役割を担うことで、各地域のより細かい、移住希望者や交流人口のニーズに即した情報提供が可能になり、地域の中での郵便局の存在感も高まる制度だと思うからである。

奥川地区は西会津町の中でも、特に山間に位置する地域である。同じ西会津町でも、道の駅をはじめ商業施設が多く、JRの駅も近い野沢地区などとは生活の様子や魅力は大きく変わってくる。各地区の郵便局が地区に合わせた、正確で魅力的な情報発信やサポートを行うことで、移住希望者・関係人口と地域住民とのすれ違いなども防ぐことができるだろう。奥川地区は関係人口が多い地区であり、奥川郵便局は地域住民との距離が非常に近い。このような特徴をもつ奥川地区で、郵便局が中心となって情報発信をし、移住希望者・関係人口と地域住民をつなぐ架け橋となることができれば、移住者・関係人口の創出や地域の活性化につながるのではないかと考える。

(4)地域住民の趣味の教室や集う場づくり

郵便局は、全国に拠点があり長い間地域に親しまれているという強みを活かし、様々な地域貢献事業を行っている。郵便・保険・貯金などの事務的な用事を済ませる場所としてだけでなく、地域住民がより良く生きられるように地域を支える、多岐に渡る事業を地域と連携しながら行っている。その中の一つとして、地域住民の趣味の教室や集う場づくりがある。

郵便局には、ロビースペースや郵便物を仕分けするために使用していたスペース、駐車場などの利活用できる空間がある。こうした場を生かし、人々が集う場を作っている事例がある。人口減少や若者の流出に伴い、家族間や地域住民間の関わりが減ることが懸念されるが、このようにして集う場を持つことで、会話をする機会が増え、趣味や楽しみの機会を充実させるなどし、人生を豊かにすることができる。

山口県周防大島町では郵便局長が中心となり、「お金をかけない・酒を飲まない・たばこを吸わない」というルールのもと、健康マージャンを毎月第3土曜日の午後1時から5時までの4時間行っている（注5）。ひきこもりがちな男性高齢者が増え、孤立感の解消が課題となっていたが、健康マージャンを行うことで地域住民間での関わりが増え、かつ毎月の楽しみを持って暮らすことができる。一般に、男性よりも女性の方が地域の集まりなどに出席する傾向があるが、健康マージャンを扱うことで男性も来やすくなるだろう。郵便局長に加え局員の方も参加しているため、郵便局で会った際には健康マージャンの話で盛り上がるという。

西会津奥川郵便局には以前郵便物の仕分けで使用していたスペースがあるので、その場を活用して住民の方の趣味の教室などを行える可能性は十分にある。楽しい取り組みであるからこそ続けることができるので、はじめのうちは、郵便局や域学連携に取り組む大学生が企画運営を行うなどして、地域住民の方の負担感を減らすことも重要だと考える。

第2章 奥川郵便局聞き取り調査結果

第1節 調査の概要

2023年9月13日（水）に、奥川郵便局来店者および局員に対し聞き取り調査を実施した。午前9時30分から午後3時頃まで学生が常駐し、来店された方に調査票に基づきお話を伺った。業務の合間を縫って局員の方々にもお話を伺うことができた。

調査項目およびインフォーマントの概要は以下のとおりである。

(1)聞き取り調査項目

○来店者の方

- ・プロフィール
- ・郵便局に来た目的、用事
- ・日頃の郵便局の利用頻度、交通手段
- ・郵便局でのコミュニケーション
- ・これまでの郵便局との関わりや思い出、局員とのエピソード
- ・奥川地区・西会津町のいいところ、好きなところ
- ・自身の生きがいや趣味、今後行ってみたいこと
- ・奥川での暮らしの困りごと
- ・郵便局の空きスペースを活用した取り組みや、期待する地域サービス
- ・郵便局のサービス等に対する感想・要望、これからの地域の活性化や大学生の活動に対する意見・要望など

○局員の方

- ・お名前・年齢・現在住んでいる集落・家族構成、勤務年数など（フェイスシート）
- ・奥川地域を回って感じること、地域の変化
- ・この地域の郵便局として、住民の方々と関わる際に意識していることや心がけていること
- ・郵便局の仕事のやりがい
- ・郵便局のもつ「強み」とは
- ・郵便局は今、地方創生につながる新たな役割を期待されているが、そのような状況についてどう思うか
- ・地域において、郵便局はどのような役割を担えると思うか
- ・人員不足等運営上の課題について
- ・郵便局と地域社会の新たな連携、取り組みについての意見 など

(2)インフォーマントの概要

図表6 インフォーマントの概要

番号	名	年代	性別	備考（居住地等）
①	Aさん	50代	女性	奥川地区
②	Bさん	70代	男性	奥川地区
③	Cさん	70代	女性	奥川地区
④	Dさん夫妻	70代・60代	夫妻	新潟県新発田市
⑤	Eさん	60代	男性	奥川地区（前局長）
⑥	Fさん	50代	男性	現局長
⑦	Gさん	30代	女性	局員

第2節 聞き取り調査結果

以下では、インフォーマントごとに聞き取り調査結果を紹介し、聞き取りを行った学生のコメント（感想や気づき等）を記載する。

①来店者 Aさん

○プロフィール

50代の女性である。奥川地区の中町集落に夫と夫の父母の4人で暮らしている。息子は現在、新潟の大学に進学をしている。建設会社に勤めており、買い入れした際の帳簿を付けたり、支払いや印紙を貼ったりする事務作業を行っている。

○日々の郵便局の利用について

月に3回から4回利用しており、郵便局への交通手段は車を使っている。主に会社での事務作業の契約に使われる印紙を購入するために利用している。個人的な利用としても米を送ったり、宅配を出したりしている。郵便局の局員さんには知り合いの方がいて、互いの業務に支障をきたさない範囲で長話をしたりしているという。

○地元の郵便局はどのような場所か

「なくてはならない」と語っていた。奥川地区に郵便局がないと、印紙や切手など、会社の契約関係の書類を提出する際に野沢地区に行かなければならない。そこに行くには時間的、労力的に負担となり、奥川地区に郵便局がないと不便だという。持ち込み品などの割引も適用されることから個人的な利用としても郵便局を訪れるため、奥川地区に郵便局が存

在していることがすごく助かっていると語っていた。

○調査学生のコメント

お話を通して奥川地区の郵便局が住民の方にとって、仕事でも日常生活でも必要不可欠な場所であると感じた。住民の生活圏に沿って郵便局が細かく配置されていることにより、遠くにいる取引先や知り合い、そして家族といった人と人を繋ぎ、笑顔を伝える役割を郵便局は担っている。そこに地域に暮らしの姿がある限りは、郵便局が過疎地域に配置されなければならないひとつの理由があると思う。加えて、Aさんが郵便局員さんとお話しをすることがあるように、住民の方と密接に関わることが出来るからこそ、過疎地域にある郵便局は多くの人と人をつなげるだけでなく、住民の方にとっての居場所としての役割も担っていると感じた。

②来店者 Bさん

○プロフィール

Bさんは70歳の男性で奥川地区の中ノ沢集落に住んでいる。普段はお米やニラの栽培をされている。お米は50aほどの面積で栽培を行っておられるそう。また、シルバー人材センターで道の草刈りなどの仕事をしておられる。奥川での子どもの頃の思い出を楽しそうに話してくださった。

○日々の郵便局の利用について

郵便局の簡易保険の説明を聞く際や郵便局の年金をもらう際によく訪れるという。郵便局の年金は制度が良いということを局員さんに聞き、そこから利用されているそう。郵便局へは自分で車を運転して1か月に5、6回程度訪れておられる。奥川郵便局がなくなってしまうと遠くまで行かなくてはいけなくなり、お米などの配送が大変になってしまうため、「なくなったらダメだ」と話しておられた。

○奥川地区のいいところ

西会津町の「日本の田舎」というキャッチコピーを気に入っておられるそう。また、西会津国際芸術村のお話を詳しくしてくださった。西会津国際芸術村は、廃校となった新郷中学校の木造校舎をリノベーションした建物であり、芸術を通した国際交流や、移住者相談等を行っている。ディレクターをされているHさんは、Bさんと同じ集落に住んでおり、古民家ホテルの経営も行っている（後掲の第3章で詳述）。Bさんはホテルを見学したことがあり、「眺めがよく良いところである」と話しておられた。ホテルを訪れる客は県外や国外からの人が多いが、「外から来る人が増えても抵抗はない」とおっしゃっていた。

○生きがいや趣味

趣味はきのこ作り。ひらたけやしいたけを作っているそう。作ったひらたけは売らずに自分で食べたり人にあげたりしている。



○奥川地区での暮らしにおける困りごと

困っていることとしては、お店がなくなってきていることを挙げていた。自分で運転ができるため、買い物は野沢や会津坂下まで行っており、移動販売はあまり使っていない。移動販売を使っている人は、主に仕事で奥川にいる人や車がない人だという。

もう一つは、空き家が増えていることを挙げていた。中ノ沢集落は、昔は 35 軒程あったが、今は半分以下に減少してしまったそうだ。「仕事がなく働く場所がないため、出ていくしかない」という。

○大学生に対する意見

ゼミ生が他の集落の堰上げに行ったことをお伝えすると、「自分の集落の堰上げもやってほしい」と言っていた。また、中ノ沢集落に登山口がある高陽山は、標高 1126m の山で、うつくしま百名山に選定されている。「高陽山の山開きの時にぜひ来てほしい」というご提案を頂いた。

○調査学生のコメント

自らの仕事に誇りを持っており、奥川をよりよくするための要望をしっかり持っていた。暮らしの中での困りごととしては車がないと不便であること、空き家の増加を挙げていた。自分自身は車を持っているため特に不便だと感じていなくても、車を持っていない人にとっては不便ではないか、農業をやっていない人は仕事がなく出て行ってしまいうなど、自分の話だけでなく奥川地区全体の課題についてお話されていたことが印象に残った。

1 時間超えの長時間のインタビューになってしまったが、嫌な顔せず、積極的にお話してくださいました。大学生の活動に対して否定的な考えはなく、ぜひ手伝ってほしいというお話をいただいたため、私たち大学生でできることを協力していきたいと思った。

③来店者 Cさん

○プロフィール

Cさんは70代の女性で、主婦をしている。出身は郡山市である。福島県内で生活改良普

及員を務め、農家の女性グループを作り料理教室等の生活に関わる仕事をしてきた。退職をした後は、西会津町奥川地区下松集落で生活をしている。50 代の息子さんと娘さんが一人ずつおり、それぞれ西白河と千葉に居住している。息子さんは、会社員で、娘さんは学校の先生をしている。奥川には休みの際などに来てくれるようだ。

○郵便局に来た目的、頻度、交通手段

本日は、郵便局に振込をしにきた。月に 3 回ほど郵便局を訪れている。そのほとんどは振込などの用事である。

郵便局には自家用車で来ており、自分で運転をしている。会津若松、郡山までは運転をしているそうで、やはり車がないと不便と感じるようだ。デマンドバスの存在は認知しているが、利用の頻度は少ないようだ。しかし、デマンドバスは乗り心地がよく、親切なので無くしてほしくないと語っていた。

○郵便局局員との交流

振込などには ATM を利用しているようだが、窓口が開いているときは窓口を使用している。局員とは窓口で、気候や山のことなどを話す。歴代の局員さんたちは親切な人ばかりで、親しくしてもらった。局内で会う人もだいたい知り合いで、会話をすることが多々あるという。

○奥川地区のいいところ

「住めば都で、何もないところがかえっていいところ」と語っていた。お米が美味しいのもいいところで、いつも購入するお米は奥川の決まった農家さんから買っている。そこで購入したお米は、お子さんにも送っている。お子さんからも好評で、一袋送っても足りなくなるようで、他は食べられないというほどだそうだ。夜は、ほとんど明かりがなく、星空がきれいに見えるのもいいところだと話してくださった。

○いきがい、趣味

まわりのおばあちゃんと集落を行き来してお茶のみをするのが楽しみである。お茶のみをする際は、家でとれた野菜を持ってきてくれる。地域の人とお茶のみは様々な場所であり、家にそれぞれ行く場合もあれば、集会所を利用し冬場は輪投げ大会、手芸などをすることもあるそうだ。奥川で多くの人が集まるイベントは年に 10 回ほど開催されているという。

○奥川地区での暮らしにおける困りごと

人の数より、サルやイノシシといった動物の数のほうが多くなってしまい大変だとのことである。Cさんは、特に遭遇したことはないようだが、庭をかき回されたり、友人が野菜を

食べられたといった被害にあったりしたそう。動物に食べられたカボチャは外側が残るので、そこを食べるとおいしいとおばあちゃんが言っていたなどというエピソードを教えてくださいました。

○郵便局の空きスペースの活用

「むらの保健室」については、公民館で似たようなことをやっており、特に必要性は感じていない。空きスペースの有効活用についても、「郵便局にわざわざ寄っていく人は少ないのではないか」、「飯豊山の登山口がある弥平四郎集落でも観光客向けの取り組みをやっているのでは、それほど利用者は見込めないのではないか」と話されていた。お孫さんが帰ってきた時は、墓参りがやつのことで、地域のイベントに参加する暇はないそう。

○大学生に期待すること

人足が高齢化により辛くなりつつあり、担い手として大学生に来てほしいそう。また、「お願いしたくてもどこにお願いすればいいかわからない」とも話していた。大学生が奥川地区に来ていることは知らなかったようだ。

○調査学生のコメント

とても活気のある方だなと感じた。奥川のいいところを多く語ってくれた反面、オンデマンドバスをなくさないでほしい、獣害が大変、下松集落の方には大学生が来ないといった様々な課題を出してくださった。この声はこれからのゼミ活動の方向性について考える大事な判断材料になると考えられる。



④来店者 D夫妻

○プロフィール

70代男性と60代女性のご夫婦である。新潟県新発田市在住で、二人暮らしである。男性は、退職前まで電気関係のお仕事をしており、現在は自給用としてイチジクやキュウリなどを作る程度の農業をしている。お二人とも登山が趣味で、よく飯豊山や高陽山に登りに来ており、その際に奥川を車で通ったことが何度もある。

○郵便局を訪れた目的

この日行われていた出戸集落の岩屋祭りのために奥川を訪れ、そこで岩崎先生が郵便局にいることを聞き、郵便局に寄ったそう。岩崎先生とは極入地区の祭礼で初めて出会った。奥川郵便局に来たのは今回が初めてである。

○奥川の印象、感想など

自然が豊かで、景色が神秘的な感じがするという。飯豊山や高陽山に登るために奥川には何度も訪れているが、どこかに寄ることは一度もなかったため、奥川については何も知らないとのことだった。

○地元の郵便局の利用について

お二人の地元にはいくつか郵便局があり、特定の郵便局だけで用事を済ませるわけではないそうだ。普段郵便局を利用するときは、事務的な用事を済ませるためだけに利用することがほとんどだという。局員に友人がいた時はその方と会話をすることもあったが、それ以外では他の利用客や局員とコミュニケーションを取ることは特になかったそうだ。

○郵便局の空きスペースの活用について

郵便局と地域が一体となって課題解決に向けた取り組みをしているということを、地元では聞いたことがなかったため、空きスペースの活用方法についてもイメージしづらいそうだ。ただ、空きスペースで奥川の野菜や米などを売れば、外から訪れた人も寄りやすくなるのではないかと話された。

○調査学生のコメント

奥川の方ではなく、新潟から来られた方という時点で驚いたが、高陽山や飯豊山は登山客に人気らしく、その点を考えると腑に落ちた。お二人のお話を聞き、登山のためだけに奥川を訪れることはあっても、通り過ぎるだけで終わってしまう人は他にも多数いるのではないか。お二人にとっては、「郵便局＝事務的な用事を済ませる場所」というイメージしかないというお話を聞き、住民と局員がよく世間話をするような、地域との距離が近い郵便局というのは奥川ならではの良さなのだった。また、空きスペースを活用して奥川の米や野菜を売れば、登山などで外部から訪れた人も寄りやすくなるのではないかというご意見をい

ただいた。局内に、高陽山や飯豊山から見える景色やその他の奥川の美しい景観などの写真も展示すれば、より関心が高まるのではないか。そうすることで、ただ通り過ぎるだけで終わるのではなく、奥川で一度足を止めてもらい、関係人口を生み出すことに繋がるのではないかと考えた。

⑤前郵便局長 Eさん

○プロフィール

出身は奥川から4キロほど離れた場所にある松峰地区。奥川郵便局では47歳のころから16年の間局長として勤務し、63歳になる2023年3月31日に退職した。また、奥川郵便局には1999（平成11）年に1度勤務したことがあり、その時は1年間勤務した後、翌年には坂下局へ異動となった。現在は農家を手伝いながら、役場から与えられたボランティアのような役職をこなしている。娘が4人いる。

○奥川地区のいいところと悪いところ

いいところとして、奥川は人柄がお人よしで明るい性格で、大学生等の受け入れもよく行っているところ。悪いところとしては、高齢化が進んでいるため地域を変えていこうというエネルギーがないところ。若い人が少ないところ。

○勤務していた時に奥川に対して感じたこと

昔は町全体で運動会や盆踊りなど様々な行事を行っていたが、人口が減ったことによりエネルギーがなくなり、そのような機会も減ってきている。夫婦どちらかが亡くなってしまうと、遠方に住むそのご家族が引き取ることで、奥川から二人いなくなってしまう。

○業務内容以外での住民の方とのコミュニケーション

業務を行う際にお客さんの生活が見えてくる。時には保険などのお客さんの生死に関わる会話も行うため、その会話の中身に重みも必要だ。手紙をいただいたり電話をいただいたりすることもあった。みまもりサービスで訪れていたお宅では、より深い付き合いになるため、日常生活での困りごとなどの業務以外での話をすることも度々あった。こういった一見すると雑用のような業務こそが住民へのサービスだと感じていた。

○奥川郵便局の強みは何か

都市部には決められたマニュアルをその通りに行う必要があるが、田舎ではお客さんの状況が大きく変わるため「プラスアルファ」のことが出来る。それこそが奥川郵便局の強みである。

また、業務的な仕事をする人と、プラスアルファの仕事をする人の分業が行われているこ

とも重要である。Eさんが勤務していたころは、職員同士のコミュニケーションを重要視しており、特に雇用に力を入れていた。民営化以降は、地元の人をアルバイトとして雇い、いずれ正規の社員として採用することが多かった。こうすることで、地元の人間が地元でサービスを提供することが可能になり、地元の人たちと色々なことが出来る。これもまた一つの強みである。Eさんは16年の間に13人もの人を地元から採用した。

○郵便局が持つ地域活性化への役割について

公民館のような場所として使われて欲しい。来ていただいたお客さんにカウンターでお茶を出したり、世間話をしたりなど。しかし、防犯上望ましいことではないのは確か。

○郵便局と大学生の連携について

大学生に多くの意見を出して欲しい。これだけ多くの時間と人数とお金をかけているわけだから、大きい小さいではなく、何か一つ形にして欲しい。また、地域の人を巻き込んで参加型のものを作って欲しい。今までは住民の手の届く範囲でしか行動できなかったが、大学生のアイデアとエネルギーを活用して様々なことに挑戦できるはず。何をするにしても継続して行って欲しい。

○調査学生のコメント

Eさんが奥川郵便局にとって非常に大きな存在であったことを知った。Eさんがいかに「地元」を大事に思っているか窺えた。地域の方にとっても、奥川郵便局が居場所のような場所になっていることがわかった。また、我々大学生が奥川にとってのエネルギーに十分なり得ることを改めて実感した。大学生自らが主体となって地域活性化を図ることも良いが、Eさんがおっしゃっていたように地域住民の方々とともに、町全体で盛り上げていくことが最も大切なことだと感じた。まだまだ課題の残るところではあるが、地域の方々や郵便局、行政、さらには外部の大学生などの人材が手を取り合って、何か形にしていく取り組みをしていきたい。



⑥郵便局長 Fさん

○プロフィール

Fさんは50歳代で、町内の群岡地区に住んでいる。奥川郵便局には2023年4月から勤めているが、およそ10年前にも1度奥川郵便局で勤務しており、今回で2度目の勤務になる。

○住民とのコミュニケーションで意識していること

なるべく前に出てお客様と挨拶するようにして、会話やコミュニケーションをとるようにしているという。業務以外の会話の内容としては、住民の方と天気や季節の話などの日常会話をするとのことだった。

○奥川郵便局の強みについて

多くの郵便局では他地区から通勤している社員が多いが、奥川郵便局ではスタッフのほとんどが奥川に近い出身で、「お客様から見れば地元の人がいるからってということで親しみやすい局ではあるのかな」とお話しされていた。

○地域活性化に重要な役割を期待されている郵便局の状況について考えること

人口減少でお客様が減っているため、郵便局で何かをしなければいけないと取り組みはあちこちでやっている。奥川郵便局ではないが、例えば郵便局のスペースを使って無人販売などをやっているところもあるという。

○お客様からの悩みごとの相談について

できる範囲で困っていることにお答えしているとのことだった。例えばワクチン接種の申し込みなどをわかる範囲で確認しているという。

○奥川で郵便局はどのような役割を担えると思うか

「地域になくてはならない存在」。もし奥川郵便局での年金の受け取りができなくなれば、年金をもらうのに遠くまで車で行かなければならない。郵便局は地域になくてはならない存在になってきているとのことだった。

○郵便局の課題

人員不足が課題である。郵便局は金融機関であるため、防犯上の理由から常時二人はいるようにしていて、人員不足の理由の一つになっている。また、人口減によるお客様の減少も課題になっているという。

○大学生の協力や連携活動に関する意見や要望

「色々なイベントなどを企画していただいて、郵便局を利用していただけるような環境をつくっていただければ」とのことで、郵便局のスペースを利用したギャラリー（写真展）、「むらの保健室」などもいいかなとお話しされていた。郵便局に来たことがない方がイベント目的で来たついでに郵便局を利用してもらうことは、郵便局ファンを増やす意味でも効果はあるとお話しされていた。また、昔は「局便り」を発行していたが今はやっていないということで、学生たちが局便り（新聞）を復活させることに関しても前向きであった。

「郵便局に行けば、何か良いことがあった、知らないことが一つでもよく分かった、色んな商品売っているんだな、などと思っていただければ良い」とのことだった。

○郵便局のお客様とのやり取りで印象的だったエピソード

お客様から「ありがとうございました」「よかった」って言ってもらえるのが一番のやりがいであり、モチベーションの上がる部分であると教えていただいた。保険に加入した人から、「入っていてよかった」と言ってもらえると嬉しいとお話しされていた。節目節目にはお金も必要だし、やがては「こういう風に残す部分も欲しい」などと、自分の一生涯の保障、何かあったときの保障など、人生に寄り添う仕事であるとのことだった。

○過疎地域だからこそ大変さは何か

保険に関しては70歳以上の方が加入するとき、ご家族の同席が必要になってきているので、高齢化により募集が難しくなっているとのことだった。

○奥川の誇れるものと課題は何か

地域おこし協力隊の方などが活性化のために様々なことをしているため、誇れるものは人材であり、少子高齢化で若者がいないことが課題だという。コンビニがないのも不便とのことで、空き家を活用して若い方が入ってきてくれればとお話しされていた。高校まで西会津にいても、大学の所在地で就職して、大体戻ってこないパターンだという。また、世帯を持ってしまうとどうしてもそこに住居を構えて、時々実家に来る形になるが、そのうちあまり帰ってこなくなって、家も空いてしまうような状態になってしまうとのことだった。

○調査学生のコメント

郵便局長として地域と住民と郵便局のこれからのあり方を考えている点と、郵便局と大学生の連携に期待されていることが印象に残った。また、郵便局利用者と自ら進んでコミュニケーションを取ることで、利用者の方が郵便局に親しみを持てるように意識していらっしゃるのだと思った。金融機関の役割を持つ郵便局が地域に不可欠だとお話しされていたが、地域住民の交流の場としても地域になくてはならない存在になれるよう、私たち大学生が郵便局の空きスペースの活用法について考え、実践していきたい。

⑦郵便局員 Gさん

○プロフィール

Gさんは30代の女性であり、西会津町の野沢地区に住んでいる。震災をきっかけに、千葉からUターンをしてきた。郵便局に7～8年勤めており、西会津町にある4つの郵便局を非常勤で回っている。

○地域の変化について

移住者や協力隊が増えたという印象がある。また、奥川の住民が地域づくりに積極的になったと感じるという。

○住民の方々と関わる際に意識していることについて

Gさん自身、堅苦しさが苦手であるため、なるべくフレンドリーに接することに気を付けているようだ。郵便局を回っている中で地域によって人柄が違っていると感じており、「野沢は人口が奥川よりも多いのでちょっと都会的、どんどん山の方に行くにつれて人柄がみんな優しくなる」、「奥川は人が優しい人ばかりで、孫のように扱ってくれる」などと、地域によって住民の気質に違いがあるという。

○郵便局による地域活性化における新たな役割について

高齢者が多い地域であることと、郵便局を頼っている人が多いことから、分からないことについて電話がかかってくることが多くあるという。また、地域に銀行が郵便局と農協しかないため、何かあった時の駆け込み場所になっているそう。このことから、「みまもりのような役割が必要なのではないか」と語った。

○郵便局と地域社会の新たな取り組みについての意見

郵便局の堅苦しいイメージを払しょくするために、さらに地域に入っていってもいいのではないかという。「西会津町の文化祭や雪まつりに、農協さんやほかの企業さんは出店をしているが、郵便局はそういう場に入っていない、意外とそういうところで地域のつながりができると思う」と述べ、「地域のイベントに郵便局ブースを設置するのがいいのではないか」と話した。

○郵便局の協力や連携活動に対する意見

郵便局と大学生が一緒にできることとして、立ち寄りカフェのようなものを行えば良いのではと話した。年金を下ろしに来たついでに、自分の孫のような学生がいて、日常的な会

話を楽しみながらお茶を飲むようなカフェをできれば良いと話された。

○観光客について

奥川へ観光に来る人はほぼいないが、ツーリングをしている人が新潟方面から奥川を通
過していくことが頻繁にあるそうだ。また、風景印を求めに郵便局を訪れる客も稀にいると
話した。このような人たちに少しでも、「奥川はこんな地域なんだ」というのを知ってもら
うために、奥川の魅力を書いたマップを渡すのがいいのではないかという。

○調査学生のコメント

Gさんにお話を伺い、自分が思っている以上に、郵便局が奥川の住民にとってかけがえの
ないものであるということがわかった。また、奥川の住民が郵便局を信頼しているからこそ、
Gさんも、それに応える形で奥川に貢献したいという気持ちがあるように感じられた。大学
生と郵便局の連携活動に対しても前向きで、こちらからの提案に賛同してくださった。

第3章 コミュニティ・カフェ実証実験結果

第1節 実証実験の目的

過疎地域における郵便局は、地域住民の暮らしになくてはならない存在であり、また、建物自体が、郵便サービスの利用という用途を越えた、公共的な集いの場所としての役割を担う可能性がある。本年度は、郵便局を拠点とした新たなコミュニティ形成の可能性を実践的に追究するため、学生と住民によるコミュニティ・カフェの実証実験を行い、こうした取り組みにおいて期待される郵便局の役割と可能性について検討を加えることとした。

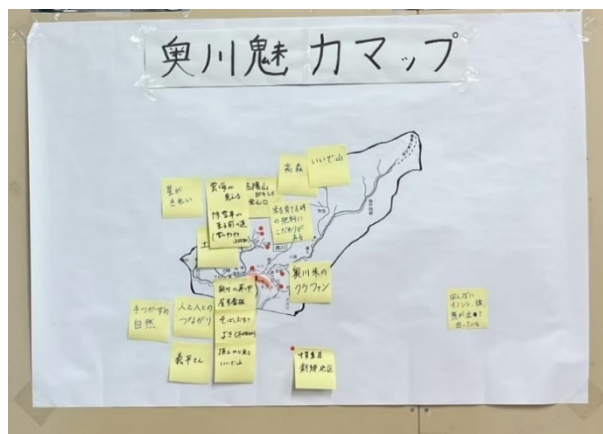
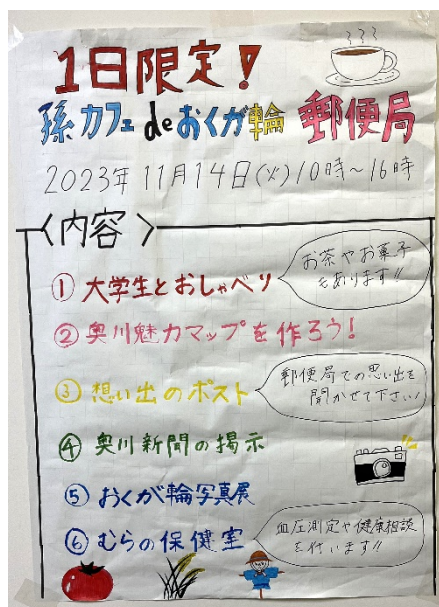
2023年11月14日（火）に、西会津町奥川郵便局の空きスペースをお借りし、「1日限定！孫カフェ de おくが輪郵便局」というテーマで、カフェを実施することになった。岩崎ゼミが以前に「1日孫体験」の活動を中町集落で行っていた経験と、学生が住民の方たちの孫世代であることをふまえてこのようなフレーズをつけた。実証実験日の前週までの数週間を企画名、イベント内容、ポスターの作成、「奥川新聞」の作成に使いギリギリになったが、なんとか準備を終えた。

当日、学生たちは、西会津奥川郵便局に到着後、局員の方々に挨拶をし、ワークショップの準備に取り掛かった。事前に準備した奥川の地図やポストを描いた模造紙、写真などを掲示し、また交流会用のお茶菓子をセッティングした。さらに、「奥川魅力マップ」の作成、「思い出のポスト」、大学生が作成した「奥川新聞」の配布、「おくが輪写真展」、「むらの保健室」を行った（図表7）。

図表7 実証実験の内容

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 孫カフェ（お茶やお菓子を食べながら学生とおしゃべり、交流）②奥川魅力マップの作成（奥川の白地図を準備し、住民の意見を聞きながら作成）③思い出のポスト（住民の方々の郵便局の思い出や印象を聞き、模造紙に書き出す）④学生が作成した「奥川新聞」（大学生の活動報告、住民への取材）の配布⑤おくが輪写真展（岩崎ゼミの学生が今まで奥川を訪れた際に地域住民の方と撮影した沢山の写真を壁に貼り、住民の方に見てもらう）⑥むらの保健室（保健師さんに来て頂き血圧測定や健康相談） |
|--|

「奥川魅力マップ」とは、準備した奥川の白地図に住民の意見を聞きながら奥川の魅力だ
 と思うことや場所を書いていくというものである。奥川の様々な集落から住民の方々が訪
 れてくださり、学生たちが知らない奥川の魅力を知ることができた。



「思い出のポスト」とは、住民の方々の郵便局の思い出や印象を聞き、模造紙に書き出す
 というものである。この企画によって住民の方々の郵便局の活用方法や郵便局に対する思い
 などを聞くことができた。また、「おくが輪写真展」では地域住民と学生が入った写真を壁
 一面に展示した。学生たちが写っている写真もあれば、数年前の写真もあり、奥川との交流
 の深さ、歴史をひしひしと感ずることができた。



「むらの保健室」では、実際に保健師さんに
 来ていただき、主に血圧測定を行った。学生と
 お話した後に血圧測定をして帰っていかれる
 方が数名いた。実際に測定している人たちのな
 かには、家で毎朝血圧の測定をしているという
 人もいた。保健師さんは測定に来た人に対し、
 健康状態のことだけではなく、日々の生活のこ
 となどを自然な流れで聞き出しており、話しや
 すいアットホームな様子に見えた。



「孫カフェ」には地域住民の方に加え、芸術村で宿泊施設を運営する方や、奥川地区郵便局の元局員の方、現在は東京に住んでいるが時折里帰りして西会津町に帰ってくる方などおおよそ 10 名近くの方が訪れた。多くの地域住民の方がかなりの時間滞在してくださり、「孫カフェ」は好評のように思えた。

第2節 実証実験の記録

以下では、孫カフェを訪問してくださった方との会話の記録を、学生たちのコメントををさみながら紹介する。

AM10:00

①最初の訪問者の男性が来てくださる。町集落支援員の岩橋義平さん（以下、適宜「義平さん」とする）のお知り合いで声をかけてくださったようだ。そばを打つための道具である「そばぶち」や薪を割る道具である「よき」、玄関の段差が大きい場合に設置される「踏み台」など家にあったものを高い値段で買い取ってもらえたと話しておられた。

<学生のコメント>

奥川に住む人にとっては当たり前のものでも都会の人からすると珍しいと感じるものが地区の中にはたくさんあることを知った。これらを使いまちおこしができるのではないかと思った。



②次に郵便局にこられた住民の男性の方は、「兄弟に米を送るために郵便局を利用することがある」と話しておられた。「奥川郵便局では米袋のまま送ることができるようになっていたため大変便利である」とのこと。

住んでおられる中町集落のいいところをお聞きすると、「奥川の真ん中に位置していること」と「屋号看板が設置されていること」だと話しておられた。また、「山の頂上から見る飯豊山の景色が好き」だとおっしゃっていた。最初は、「いいところは何もない」と話しておられたが、何気ない会話をする中で奥川ならではの魅力をたくさん伝えてくださった。



③9/13の聞き取り調査でお会いした住民Bさんに再びお話を聞くことができた。ヒラタケやマイタケを先生に送っておられ、当日は新米も持ってきてくださった。

奥川ではイノシシやサル、熊が多いので、「米を守るには電柵をしなければいけない」と話しておられた。そのため、「非常にお金がかかり困る」とおっしゃっておられた。

お住まいの中ノ沢集落のいいところについては、「高陽山の登山口がある、小学校のころ登った」、「マイタケが採れる」とのことだった。高陽山には小学校の頃に学校行事で登ったことがあるそうだ。

続いて、奥川の米の話題になると、「やはり奥川の米は美味しい」と意気揚々とおっしゃっていた。「米を作る際の肥料が違う、こだわりがある、土が良い」とのことだった。米を作る際の肥料が人によって異なるらしく、聞き



取りをした方は油かすを入れているとのことだった。肥料ひとつとっても様々なこだわりがあるとのことだ。

次にお祭りの話になり、西会津町では秋にふるさと祭り、冬に雪祭りがあり、学生も誘ってくれた。一方、地元の中ノ沢集落では、昔は祭りや歳の神を行っていたが今は人もいないため行えていないこと、小正月の団子指しもやらなくなったとのことである。

その後、消防団の話になった。Bさんは70代だが現在も現役の消防団員である。福島市の消防学校で、平成15年頃に学科・研修を受けた。当時は3泊4日の研修で、点呼が取られたり、朝から掃除があったり、消灯は21時だった。現在は1泊2日で行われる。県内の色んなところから消防団の人が来ており、色んな人と出会った。

西会津には消防団が全部で5分団あり、中ノ沢消防団は第5分団に属する。若い人がおらず、現在中ノ沢消防団はBさん一人のみ。昔は沢山団員がいたが、亡くなったり歳を取ったりで今はいない。

最後に、岩崎先生が発した「若者たちへ一言」という言葉をきっかけに、Bさんが「君の行く道は～」と歌い出した。40年以上前に公民館で歌声喫茶をしたことがある。当時の歌の本を今も持っているそうだ。

<学生のコメント>



「地元の良いところ」と聞いて速攻で高陽山の名前を出すなど、地元の魅力を理解していらっしゃるのは素敵なことだと思った。また、地元の山を学校行事として登るという体験は楽しそうだった。登山のことだけでなく、マイタケが採れるなどという情報は、まさに地元住民ならではの情報で、これもまた魅力の一つだと感じた。奥川米についても非常に誇りを持っていることが伝わってきた。一方で、今は人手が足らず出来ない行事がほとんどだと話されていた時は、少し寂しそうにも感じた。

10:40～

④新郷地区の男性の方が来てくださった。奥川地区の方ではなかったが、奥川の魅力についてお聞きすると即座に、「手つかずの自然、人と人とのつながり」とおっしゃった。

<学生のコメント>

住民以外の方でも奥川の魅力をはっきり言えるほど、奥川は魅力にあふれた地域だと思った。

⑤ カフェに来た住民がお知り合い同士だったようで、自分の話したいことを自由に会話されていた。 人足体験ツアーに参加した学生が、草刈りが大変だったことを話すと、奥川には何回来たのか、など話に花が咲いた。 また、東日本大震災当時のことやその後の復興状況についてお互いに話し合っていた。東北では譲り合いの精神が素晴らしく、弁当を譲ろうと喧嘩している場面もあったなどの会話があった。

11:00～

⑥ 西会津国際芸術村ディレクターの H さんが来てくださった。義平さんが声をかけてくださっていたようだ。最近、多くの福島大学生が国際芸術村を訪問している。学生が作成した「奥川新聞」を渡すと、「何回も奥川地区に来ているのか」と聞かれた。「今年は3、4回来ている。歓喜天のお祭り（後掲第4章第2章に詳述）に行ったり、一部の学生は人足体験に行ったりしている」と先生が話したところ、「人足では、全員が無言になった、過酷だったと聞いた」と H さんは笑いながらおっしゃった。

H さんは喜多方市の出身で、美術系の大学を卒業後海外で仕事をしていたが、東日本大震災後、祖父の自宅がある奥川地区に「孫ターン」として戻ってきた。岩崎先生が、「H さんに憧れて西会津に色々な人が来るじゃないですか。ものすごい高齢化率の高い、崖っぷちのイメージがあるかもしれないですけど、逆に私はものすごい希望を感じている」というと、H さんは次のように話した。

「自分自身が絶望しないように頑張っているのが一番大きいかもしれませんね。前は海外でデザインの仕事をしていたので、正直ニューヨークかドイツで働こうと思っていたんですよ。東日本大震災が起こって、（西会津・奥川が）なくなっちゃう気がした。年取ってから来ようと思っていたんですけど、衰退のスピードがすごく早くなって、高齢化率とか人口減少率とか色々調べたんですよ。そうしたら10年経ったらけっこうやばい、20年経ったら無くなるかもみたいになった時に、ちょっとまずいなと思って、なんとか自分でできることをやろうと思ってこっちに来たんです。戻ってきたことに絶望しないためには頑張りを続けるしかないの。」

続いて、奥川地区と他の地域との違いについて話された。

「奥川が西会津の中でもすごく全然違うんですよ、雰囲気。元気っていうか、なんだろうね、とにかく 自分らのことは自分らでするっていう勢いが町の他の部分より明らかに強いんです。中心部の野沢に行くと、何でもかんでも人にやってもらおうとする人が多いんです

けど、こっちは自治というか、自分たちでなんかしなきゃいけないって言う。この自治の気持ちが一番日本で一番足りないって言われているもの。この国の経済がどんどん下がっていて、未来もどうなるか分かんないって言って、もうすぐ日本円は価値が無くなるって言う人も出てきているくらい、日本の力が弱くなっている。それは自治の意識が下がっていることが1番の課題なんですよ。でもこの奥川は、その意識がすごく強い。」

奥川地区でのフィールドワークで住民の方と交流する中で、奥川地区特有の雰囲気をなんとなく感じていたが、それが「自治の意識」の強さから生まれているものだということが分かった。奥川地区では、年齢を重ねても強い自治の意識を維持することにもつながっていて、それが逆に強みにもなっていると感じた。

その後、Hさんが運営している古民家ホテルの話になった。

「あその場所を本当に大切にしてくれる人を一人でもいいから探して、継げるように。そして継いだ時には僕よりはちょっと苦労しないで、あそこでお金を稼げる状態にできれば」とおっしゃった。そして、「お金じゃない楽しみとか価値がいっぱいあるし、そういう場所をやっているからたくさんの人に出会える」ともおっしゃった。この言葉から、自分がつくった宿泊施設を宝物のように思っていることが伝わってきた。また、借金をしながらつくった宿泊施設とのことなので、今を維持していくことだけでも大変だが、自分のためだけでなく、自分の後を継ぐ人のことを思って活動していることが印象に残った。

一方、地域で経済的価値を作り出していくことの大切さについてHさんは次のように話された。

「結局、本当の価値は金じゃないんですけど、なんせ金が必要なんですよ。それが今のところ奥川の弱みで、それを得ることと回すことができないので、そういうことを作っていく必要がある。それが今後の課題。まず地域の中に入るときは、どれぐらいの人口がいて、何歳ぐらいの人がどれぐらいいて、その人たちがどうやって稼いでいるかを調べるのはけっこう大事です。稼ぎが続かないと人がいなくなるので。

自治は基本的に全部ボランティア労働ですから、それが基本なんですけど、とはいえお金がないとできないことが実はたくさんある。非常に難しいんですけど、地域自治と経営を一緒に考えないといけない。でも金のことを考えた瞬間に、あいつ金のことしか考えていないっていじめられる（笑）。宿の値段が高いでしょ、それだけで色々言われるわけですよ。地域づくりはやろうとするとだいたい悪者にされる。」

次に、奥川地区の魅力について聞くと、Hさんは、「いっぱいありますよ。朝起きると家から雲海が見えるんです。星はすごく綺麗だし。あとね、雪の時ね、除雪車が来ないと普通走れないんですけど、除雪車が来ていない道路を走るのがすごく気持ちいいんですよ。砂

丘のように雪がすごく滑らかですごくきれいな。本当に綺麗なんですよ。」とおっしゃった。奥川地区で生活しているからこそ分かる魅力を教えていただいた。

<学生のコメント>

・Hさんの「自分自身が絶望しないように」という話は新鮮に感じた。地域のため、住民のためというのを考えることは重要である。しかし、それと同等以上に、地域づくりにおいて自分がどうしたいのか、どうありたいのかを考えることは重要であると感じた。

・魅力を聞かれた際に「いっぱいありますよ」と答えることができるというのがすごいと思った。Hさんに限らず、奥川地区の住民の方は奥川地区の魅力を語ることができる人が多い。他の地域で同じ質問をしても「何もない」と答える人が多い印象があり、即答できる人はなかなかいない。奥川地区の住民の方は魅力を語る際の表情がとても明るいため、自分が住む地域を誇りに思っている、地域が好きということがすごく伝わってくる。これは奥川地区の大きな魅力だと考える。住民が地域に関心や誇りを持っていなければ、魅力は語ることはできない。また、こういった住民が少ない地域は外部の人から見ても魅力的には見えない。奥川地区はHさんをはじめ、それができる人が多く、住民そのものが魅力の一部となっていると感じた。

・地域づくりにおける課題としてお金に関する話はこれまで聞く機会がなかったため、よりリアルな地域づくりをする上での難しさをHさんのお話を通して知ることができた。地域の中に入る際に、「地域の人たちがどうやって稼いでいるのかを調べることが大事」とおっしゃっていたのが印象に残った。人口や年齢層などはこれまでの報告書でも調査されていたが、どうやって稼いでいるかについてはそこまで大きく取り上げられていなかったし、自分自身も重要視していなかった。持続可能な地域を目指すには、「お金を稼ぐ」ことを考える必要があります、そういった視点が重要である。しかし、お金を稼ぐ手段が限られており、新しい事業を始めてもなかなか地域からの理解を得るのが難しいという課題を抱えているようだ。このような「弱み」を克服するためにも、今回の「孫カフェ」のような地域外の人と地域住民が交流する、情報発信をする取り組みは有効だと考えた。

PM1:00～

⑦西会津に研修に来ている看護学生の女性二人が来てくださった。そのうちの一人はゼミ生の志賀君の高校時代の先輩で、偶然の再会に驚いていた。

なぜ研修先が西会津だったのか尋ねると、「地元から離れたくて泊まりOKとしたら西会津になった」と笑いながらおっしゃっていた。「研修中は、サロンに行ったり、保健師さんの活動に参加して健診結果の説明を一緒にしたり、子ども園に行ったり、住民さんの声を聞いていた。健康のための事業につなげようという活動をしていた」という。

郵便局の思い出について聞くと、「嵐が好きで、毎年郵便局のポスターが楽しみだった」、「お兄ちゃんが、自転車で年賀状を配るためのバイトで駆り出されてあちこち配りにいっ

ていました」とのことだった。

西会津に来てみた印象を聞くと、「働く場所があんまりない、公共機関がもっと発達していただいいかな」、「この地域には病院とかないし、医療を受けたい時は、大きい町に行くしかない。そういう時、この地域ではどうしようとしているのか」、「難しいとは思うんですけど、非常勤でも小児科の先生に来てもらうことはできないか」などの話題が出た。



⑧福島県西部地区エリアマネージャーの方が、カフェの見学に来られていた。ゼミの取り組みを広報紙に掲載するための取材とのことだった（後掲の附属資料「福西地区エリアマネージャー情報」を参照されたい）。どうして郵便局で働こうと思ったのか尋ねると、「小学校の低学年の時にハガキかなんかを書いたんです。その時に対応してくれた窓口のおぼちゃんの対応が

あったかくて良いな」と思ったのがきっかけとのことだった。

前回の報告書で提案した「米袋に絵を描くアイデアは、面白い取り組みだと思う」と誉めてくださった。「すでにあるものを使ってアイデアで地域を盛り上げることが必要。アイデアをいかに出すかが重要」であるとおっしゃった。一方、郵便局はユニバーサルネットワークの維持が法律により義務づけられているが、国から補助が出ないため、採算が合わない郵便局が出てきてしまっているという課題について話された。

⑨奥川出身で、現在東京都町田市に住んでいる方が、前郵便局長の学校の先輩であることから、一緒に来てくださった。現在 72 歳とのことだ。

奥川の宮野地区に家があり、両親が亡くなってから家の管理も含めて年四回くらい訪れる。野菜を作ったりして年間で 90 日くらい滞在している。今回は冬に備えて、雪囲いをするために帰ってきたそうだ。「今年はクマがいっぱい出た」とおっしゃっていた。

地元でおすすめの場所があるかと質問すると、「飯豊山」と「高陽山」を挙げていた。「実家に帰ってくると、長いこと住んでいた場所なのでほんとに安心する感じがする」という。「たまたま家は高いところにあって、見晴らしがいいんですよ。それで窓越しに山が見えるんですよ。それを飯食いながら見るのが自分としては良いんですよ。そのために帰ってきているようなもんですね」とのことだった。

子どもの頃のお話を伺うと、「僕が小学生の頃は 1 学年 100 人以上いて、奥川小学校は 500 ～600 人ほどいたかな。1 学年 2 クラスだったから、1 クラス 53 人くらい。中学校で 350 人くらい」とのことだった。「教室もパンパンでしたよ。先生の目の前まで並んでいた」らしい。

「同級生・下級生・上級生のつながりがあるのは良いですね」と言うと、「上級生は割と覚えているんだけど、下の学年はあんまり覚えていないんだよね。上の学年を見ながら育ってきているから。集団登校とかもあったから」とおっしゃった。

当時は農業で生計を立てていた家がほとんどだった。「いずれここから出たいと思っていたんですか？」と聞くと、「ここにいてもしょうがないって感じだったね。職場もないから」と話された。

卒業後は東京に出て、国立の東京水産大学の職員をしていた。文部科学省に書類を直接持っていったりしていた。初めての水産大臣の祝賀パーティに駆り出されたりした。初代南極観測隊の仕事もしていたそうだ。

奥川郵便局にまつわる思い出について聞くと、「郵便局に来るのは少し遠いから小旅行のようなもんだったかな。あとは郵便配達員の人が来るから、情報を持ってきてくれる感じかな、ありがたかった」とおっしゃった。

学生が集落に関わることについては、「色んな地域から来る人はそれぞれが異なる知識をもっており、それを通して地域を見た結果、これがいいんじゃないと考えが出ればよい。地域にずっといる人は刺激がないからわからない」とおっしゃった。そして、「磐梯山のよう
な高い山は登山客が多いため道がしっかりできているが、小さな山の方が道はなく目立っ
た目印がない。そのため、大きな山ばかり登っているベテランが小さな山で遭難すること
もある。小さな山を登っていないから方角が分からないこともある。奥川のような小さな地域
のことも知っていて何かしら必ず役に立つ」と励ましてくださった。

<学生のコメント>

出身や年齢、専門分野などを気にしないで多様な人が関わることが大切だと感じた。各自が持つ知識や経験には限りや偏りがあるため、それを互いに補完していくことで新たな考えを見つけ、そして自ら探究したいという気持ちを抱くきっかけになるからだ。それがお話の中にあった私たちのような関係人口同士の刺激だけでなく、奥川の地域住民にとっての刺激にもなれば良いと思った。奥川地区に外部から多くの人が訪れている事実もあまり知られていないようだが、奥川郵便局やみらい交流館のような住民が多く来る公共の場で繋げ
られないかと思った。また「奥川新聞」のようなものも作成して家に配布できれば少しは日常生活とは異なる刺激をもたらすことが出来るかもしれないと思った。

第3節 実証実験を行った感想と考察

以下では、実証実験を行ってみたいの学生の感想と考察を述べていく。

①地域の魅力の発見 住民の考えに沿った形で地域の資源を活用

「孫カフェ」では、様々なお話や思い出話を聞くことができたが、その中でも印象に残っているのが、西会津国際芸術村ディレクターであるHさんのお話である。西会津でどのようなことを行っており、今後どのようにしていきたいかなど、我々学生にはない経験と知識をお話ししてくださった。そのほかにも、今は東京に住んでいてたまに奥川へ戻ってくるといった二地域居住の方もいらっしゃった。やはり全体的にみて高齢の方が多かった。

実証実験を通して感じたことは、地域をよりよくしたいという思いを持っている人は、隠れているだけで、実際は多くいるということである。奥川に入ってから、集落支援員の義平さんや地域おこし協力隊の渡辺さんは我々と一緒に活動をしていていたため、地域について考えていることがわかっていた。しかし、今回多くの方にお話を聞いてそれぞれ地域の魅力や守っていききたいものに誇りを持っていることがわかった。このような貴重なお話を我々大学生らがサポートしつつ、地域住民の考えに沿った形で地域の資源を活用していくべきだと思った。

また、地域にある資源として、風景や景色を挙げている方が多く、季節によって魅力が変化することは大きな特徴になると思った。地域にある風景はその場所にしかなく、ほかの場所で再現することは出来ない。それに日本の四季という特徴を生かすことで、外部からも多くの人がやってくるきっかけになると思う。私が特に魅力的だと思ったのは、住民の方が家の前で撮った冬の雪景色である。高く積みあがった雪に太陽の光が反射しており、とてもきれいな景色であった。福島出身の私でも見たことがない景色であり、雪が普段降らない地域の人や写真家の人にはかなり刺さるものであると感じた。このように日常生活に転がっている魅力は、そこに住んでいる人には気づきにくいものである。それを我々のような外部からの人間が発見することが重要であると考える。

(阿部一輝)

②多様な関係人口の発見とその要因

奥川地区には、様々な職業や年齢の人が関わっていることに驚いた。これまでは、住民は60代以上の農業に携わっている人がほとんどというイメージがあったが、今回の実証実験では看護系の学校に通う学生の方がいらっしゃったり、東京の大学で働いていて二地域居住をされている方がいらっしゃったりとイメージと異なることがあった。

また、義平さんたちが声をかけてくださったおかげで、思ったよりカフェに来てくれる方が多かった。9月13日に実施した聞き取り調査の時よりも訪れる人が多かった気がした。写真などを見たり、思い出話を語ったりして懐かしむ人が多くいて好評だったのかなと思った。

こういった点から、郵便局はコミュニティの拠点として機能する施設だと考えた。年齢や職業が様々な人が集まるため、多様な人とコミュニケーションを取ることができる場となっており、郵便局は住民が楽しく生活する手助けができる場所だと思った。

奥川の良いところや課題に関して詳しくお話される方が多く、普段から地域のことを考

えて暮らしているように思った。豊かな自然があることや、人があたたかい地域であることを良い点に挙げている方が多かった気がする。実際に自分もそういった点が奥川のいいところと思っている。

自分は「むらの保健室」の方にいる時間が長かったが、血圧測定をした方や義平さんたちの笑顔が印象的だった。初めて会った僕たちにも優しく笑顔で接してくださって、個人的には自然よりも住民の方々のやさしさが一番のいいところだと思った。また、渡辺さんが血圧測定をして帰っていった方のお名前を保健師さんに教えていて、顔と名前が一致するほどの関係性にすごいなと思った。

(伊東拓真)

③自治意識の強い奥川だからこその出会いの場づくり

今回のフィールドワークを通して感じたことは、まず、地域住民の方々は健康的で元気な方が多いということである。「孫カフェ」では、地域住民以外の方も含め 10 名の方々と交流させていただいたが、高齢の男性の方が多かった。9 月に行ったフィールドワークでは男性の方と交流する機会があまりなく、また、地域のサロン活動に参加する方が少ないという話も聞いていたため、寡黙な方や内気な方が多いのではないかと感じていた。しかし、今回交流した方はおしゃべり好きで、私たちに親しみを持って接してくれる方ばかりだった。「むらの保健室」で、血圧測定をしているところも見学させていただいたが、こちらも正常値の方が多かった。奥川地区は若い人が少ないため、高齢者であっても身の回りのことをなるべく自分の力でやる必要があるし、そういう意識が強い住民の方が多い印象がある。そのため、高齢であっても健康的で、身体的にも精神的にも元気な方が多いのではないかと感じた。

次に、奥川の魅力を語ることができる住民が多いということも印象的であった。大抵の場合、地域の魅力について質問をすると、住民よりも外部から来た人の方が魅力を語ることができて、住民の方は「何もない」と答えることが多いように感じる。外部の人から見れば魅力だと感じるものでも、地域住民にとってはそれが当たり前のものであったり、そういったことに関心がなかったりという場合があるからである。自分が住む地域に対して、関心や誇りを持っていなければ外部から来た人に魅力を伝えることは難しい。しかし、奥川の住民の方で、「何もない」と答える方はほとんどいっしやらなかった。また、奥川の魅力を語る際、住民の方の表情がとても明るいことも印象的だった。

「孫カフェ」に来てくださった H さんは、奥川の住民に関して、「自治の意識が強い」とお話をされていた。自分や自分が住む地域の課題や問題を、自分たちで対処するという意識が強いというのが奥川地区の住民の一つの特徴なのである。奥川地区には、私たち以外にも多くの方が外部から訪れ、奥川地区をフィールドにして様々な活動を行っている。交通のアクセスが決して良いとは言えない、さらには奥川地区のような過疎地域は他にも多くある中で、なぜ奥川地区にはこれだけの人が訪れるのか疑問に思っていた。しかし、H さんのお話を聞いて、地域住民が自分の住んでいる地域に強い関心と誇りを持っており、地域の課題

の対処に主体的であることが奥川地区と他の地域の違いであり、住民が大きな魅力となっているからこそ奥川地区には人が集まるのではないかと感じた。Hさんは「奥川だからこそ出会える人がいる」というお話もされており、自分が思っている以上に奥川地区は人と人の交流が盛んであり、貴重な出会いの場にもなっていることが分かった。

今回初めて郵便局の空きスペースを利用して実証実験を行ったが、郵便局は地域住民同士の交流を生み出す拠点となる可能性があると感じた。もともと奥川郵便局は職員の方と地域住民との距離が近く、普段からちょっとした世間話や交流がある郵便局であり、コミュニティ形成の拠点となる下地ができています。上述した通り、奥川の住民の方はおしゃべり好きな方が多く、「孫カフェ」のように交流できる場所があれば、奥川で生活する中での、一つの大きな楽しみになるのではないかと思います。定期的に「孫カフェ」のようなイベントを実施することは難しいかもしれないが、多くの住民の方が利用する郵便局で、そうしたきっかけをつくることで、奥川郵便局はさらに多様な人々のコミュニケーションの架け橋となると考える。

(兼子唯杜)

④奥川地区の魅力の「見える化」

どのくらいの方が「孫カフェ」に来ていただけるか不安があったが、局員さんや集落支援員の方の声かけのおかげもあり、郵便局を利用した男性を中心に「孫カフェ」を利用させていただけて良かった。快く奥川や地元住民の方ご自身のお話について話して下さり、住民の方々の人柄の良さを感じた。奥川で外部の者が関わり様々な取り組みが行われているのは、受け入れる側の方々が歓迎の姿勢を示して下さっているからだと思った。

「孫カフェ」では、生活の中での楽しみや育てている農作物などについてのお話をお聞きできた。学生が知らない地域や場所の名前がいくつも出てきたので、それらの魅力を調べて改めてマップに落とし込むのも良いと思った。奥川の魅力を聞く質問後の一言目は「何もないよ」という旨の回答をされる方が多かったが、お話を聞くと風景や山などの魅力を挙げて下さった。あくまで想像だが、若者を相手にしているために謙遜を交えて話す方もいるのではないかと思います。謙遜を交えて話すこと自体を変えるべきだとは全く思わないが、誰に対しても優劣を考えずに地域のことを話せたら良いと思った。

次に、郵便局の思い出をお聞きすると、返答に困っている方が多い印象を受けた。やはり事務的な用事のみを行う場所という印象が強いのだろうと思ったが、そのイメージを覆して様々な取り組みができる可能性を持つ施設だと思うので、奥川の郵便局を有効に利用していきたいと思った。

むらの保健室のブースからは、保健師さんと健康や生活のことを楽しそうに話している声が聞こえてきたので、地域住民の方は自身の身体について考える一つの機会になったのではないかと思います。医療施設が近くになく集落では、特に日々の健康管理が重要であると思うので、むらの保健室のように手軽に健康相談や血圧チェックを行える場は需要が高いのでは

ないかと思った。

(菅野史織)

⑤多世代交流の場の可能性

今まで何度か奥川地区を訪問したが住民の方と話す機会はあまりなかった。そのため、住民の方が大学生の私たちと積極的に話してくれてとてもうれしかった。「おくが輪写真展」の写真を見て懐かしんでくれたり、学生たちが作成した「奥川新聞」を褒めてもらえたりしたこともやってよかったなと思った。また、奥川地区の魅力を住民の方目線で聞くことができ、やはり自然が豊かなことを住民の方も魅力に思っていることを知ったので、自然を大切にしていこうと思った。

みなさんが自分の住んでいる地域の魅力を知っていることが素敵だと感じた。住民の方が自分の住んでいる地域の魅力を再認識することは私たちの活動にとっても重要だと思うので、「奥川魅力マップ」がもっとたくさん埋まると良いと思い、継続していきたいと思った。

また、お話をさせてもらった住民の方たちがみなさんとても優しくかった。何度か奥川地区に来させてもらったが、大学生の私たちが来ていることに対して住民の方はどう思っているかなと不安に思っていたが、皆さんが優しくお話ししてくれたことに安心したし、ありがたかった。普段同世代の人としか話す機会があまりないので、違う世代の方や違う職業の方のお話を聞けるのは、とても楽しかった。奥川地区の昔の様子や農家の現在抱えている問題など、普段聞くことができない重要な話を聞くことができた。

「孫カフェ」は、私にとっていろいろな世代や職業の方の話を聞く機会ができるとても充実したものになった。住民の方にも「孫カフェ」は楽しかったかどうかや、こうするともっと良いというアドバイスなど聞きたいと思った。活動をする上で住民の方と信頼関係を築くことは重要だと思うので、より多くの住民の方とお話ができるようになりたいと思った。そして、来てくださった住民の方たちが楽しくお話ができるようにコミュニケーションをもっと上手に取れるようになりたいと思った。自分から質問をしたり、話を広げたりすることがもっとできるように頑張りたい。そうすれば、より深い話を聞けたり、信頼関係を築くことができたりすると思う。

(桑机萌々香)

⑥地元への深い愛着とそれを支える郵便局へ

自分が想像していた以上に、足を運んでくださった方がいて驚いた。来て下さった方も、元教師の方、看護学生の方、元局長、元局長の知り合いで東京に住まれている方、古民家ホテルを運営されている方など、様々な貴重な話を聞くことができたとてもいい調査であった。

「おくが輪写真展」では、来ていただいた方のほぼ全員が興味を示し、「懐かしい」、「これ〇〇さんだな!」と楽しむ声が多く聞こえてきた。懐かしい写真や知り合いが写っている

写真を見て、来ていただいた方の表情が和やかになったような感じがした。懐かしいものや自分が知っているものがあると、誰でもうれしい気持ちになることがわかり、昔の写真を見ながら、思い出を語るといったようなことも今後行いたいと思った。

「むらの保健室」では、来ていただいた方の多くが血圧を測定してくれた。その際に、保健師さんと健康に関する話も生まれていたため、非常にいい取り組みだと感じた。今後このような機会があれば、今回いらした看護学生の方や、地域医療に関心がある医学生の方も交えて、このようなイベントを行いたいと思った。

「思い出のポスト」では、郵便局に関する様々なお話を聞くことができた。多く挙げられたのは、「米などを親戚に送った」というようなエピソードであった。似たようなものであれば、「子供や孫にゲーム機を送った」、「きのこを送った」というものであった。他には、「仕送り」、「振込」も挙げられた。変わったエピソードもいくつかあり、一つめは、Hさんは郵便局に外国人の方がいらした時に、通訳をお願いされたというエピソードを語ってくさった。二つめは郵便局に勤めている方のエピソードで、小さい頃行っていた郵便局のおばちゃんが優しかったため、ずっと郵便局にいいイメージをもっていたそう。そして今では郵便局員になっているというようなエピソードだった。三つめは、看護学生の方のエピソードで、兄が野球部で、お正月に自転車で年賀状を配達していたというものだった。郵便局と住民のつながりを感じ、非常に素敵なエピソードだと感じた。以上のような、たくさんのエピソードを聞き、郵便局は日常生活になくてはならないものであり、地域住民からは、プラスのイメージを持たれている機関であると感じた。

「奥川魅力マップ」では、各個人が思う奥川の魅力について伺った。住まいが奥川の方だけではなかったため、ほかの集落も含めた魅力について紹介する。一つめは、高陽山だ。現在東京に住まれている実家が奥川地区にある方のお宅からは高陽山が見えるそうで、その景色がきれいだそうです。二つめは、Hさんのお住まいから見える、雲海だ。標高が高いところに住まれている、そこから見える雲海が絶景だそうです。実際に写真を見せてもらったが、非常にきれいで、いつか実際に見てみたいと思った。また、除雪車が来る前の道もきれいだとおっしゃっていて、雪がさらさらで、ふきだまりも非常にきれいだそうです。私自身雪国出身だが、一度その光景を見てみたいと思った。三つめは人と人とのつながりだ。みんな人が良く、助け合って生活をしている。人間関係が希薄化する現代で、人と人とのつながりが濃密であることは奥川の最大の魅力ともいえるだろうと思った。

実証実験を通して、自分自身奥川についてさらに深く知れたような気がした。また、地域住民と話をする中で、やはり地域に対しての誇りを強く持っていると感じた。話をする中で、奥川を知ってほしい、有名にさせたいという上昇志向というより、一人一人が地元を愛して、現在の生活への満足度がとても高いように感じ、この生活がずっと続くことを望んでいるような感じがした。

(斎藤つぐみ)

⑦フラットな関係性の中での新たな交流

今回郵便局で行われている取り組みということで、福島県西部地区エリアマネージャーの方が取材に来ていた。その方は自分たち学生が今後どのような進路を目指しているのか、ゼミで行われている活動についてなどの質問をしていた。また、個人的に抱えている悩みについて質問をさせていただき、丁寧に答えていただいた。

また、国際芸術村や古民家ホテルを運営している H さんには、西会津町の状況や魅力、今後私たちが地域を調査、訪問する際の大切な視点を教えていただいた。今回の「孫カフェ」は貴重な場だった。以前の郵便局聞き取り調査のようなかしこまった様子でお話を聞くのとは異なるフラットな環境が非常に良かったと思う。フラットに話せるからこそ自分たちも住民の方も次々と話題を提示しやすく、意外なお話が聞けるということもある。自分たちだけでなく、地域の方にとっても普段の話し相手とは異なる若い大学生とお話が出来たことは良い機会になったと思った。

加えて、保健師さんの存在も大切だと思った。保健師さんがいると検診を通じて体調を見抜いてくれる。今回も血圧を測っていた高齢者の方の結果が良くないことに対して、保健師さんは「体調管理に気を付けてね」というような言葉をかけ、一方で高齢者は「今日は調子が悪いんだ。いつもは大丈夫だ」とジョークを話していた。軽い会話だとしても、結果が良くないと保健師の方から言われると説得力がある。誰かに言ってもらえるという環境を作ることが大切だと思った。

奥川郵便局は住民の方に限らず、多様な人との交流が出来る場だとも感じた。郡山の看護学校に通っている学生が西会津に実習に来ており、郵便局に訪れた。その一人が高校時代の部活の先輩であったため、非常に驚いた。奥川には様々な大学生が関わっていて、これまでも何度か他県からの学生と交流した。奥川を訪れるまではこんなに大学生が関わっているとは知らなかったため、郵便局を通じて活動する大学生の様子が共有され、時には交流する機会を設けることが出来たら良いと思った。各々の大学で学んでいる分野も異なるため、それらが共有されれば、自大学の学びでは気付くことのできなかった視点を得られるかもしれない。そして、その知見を活用して複合的に地域に取り入れられれば良い影響をもたらすかもしれない。

そして、大学生に限らず、H さんのような西会津で活躍する方とも交流することが出来ると思う。自分たち大学生のような外部の人は、個人の経験との比較を通して地域を見ることが多く、完全に当事者として地域を見ることは困難だが、実際に生活をして当事者からの視点で地域の課題を理解し、先を見据えて活動している方は外部の自分たちも刺激となり、より深く地域に関わっていきたいという気持ちを抱かせる。それを伝える場のひとつに郵便局があると思った。地域内外の方が互いに同じ想いを持って進まなければどこかで食い違いが生じてしまうかもしれないため、それぞれの理想を語り合う場として郵便局を活かすことが出来るのではないかと思った。

(志賀翔太)

⑧健康づくりイベントとしての「孫カフェ」

郵便局を訪れた多くの人は、各々の奥川地区の思い出や暮らしを語り聞かせてくれ、奥川地区の日常を垣間見ることが出来たように思える。中でも芸術村代表で宿泊施設を運営している H さんのお話は、地方創生を学ぶ私の身としてはかなりの勉強となった。特に頭に残っているのが、宿泊費についてのお話である。大都市や大きな観光地と比べて集客が見込めない場所では、値段の安さを武器にして戦うものだとこれまで考えていたが、実際はそうではなかった。宿泊費の値段を安くしてしまうことは、客の質を低下させてしまうことにつながり、宿泊施設の杜撰な利用、ごみのポイ捨てなどによる環境破壊等を引き起こしてしまうようだ。

また、東京に住んでいて里帰りをしていた方のお話からは、田舎ならではの日常生活を聞くことが出来た。そういったことも奥川地区の魅力なのではないかと感じた。こういった場を通じて、西会津町奥川地区での暮らしの思い出を伝承していくことはその地域の特色を風化させないためにも必要なことだと感じられた。

訪れた方のほとんどは、学生との会話を楽しんでいるようだった。会話には、脳を刺激し、不安感やストレスを和らげる効果があるようだ。もし、定期的に「孫カフェ」を開催することが出来たら、「孫カフェ」の企画自体を健康づくりイベントとして運営することが可能なのではないだろうか。

(田多羅瑠貴)

⑨住民の拠り所としての奥川郵便局

この活動を通して私が感じたことは二つある。一つ目は住民の方一人一人が奥川を誇りに思っていることである。「奥川魅力マップ」作成にあたって自分が思う奥川の魅力をお聞きした際、様々なお話を聞くことができた。高陽山や飯豊山などの奥川の魅力ある場所や人と人の繋がりが深いといったような人間関係の魅力、自然の魅力など、様々な角度からの魅力を教えていただいた。中でも私が惹かれたのは「人と人との繋がり」である。「孫カフェ」に訪れた住民の方々全員がお互いのことを知っていたり、前に来た人のお話と次に来た人のお話が繋がっていたりするなど、小さな地区だからこそ見える人と人との繋がりを肌で感じることができた。お互いのことを知っているというのは当たり前のように感じるが、今の世の中実際は隣に住んでいる人のことも詳しく知らない人がほとんどである。もちろん住んでいる場所の規模や人口が違うということもあるが、ここまで繋がりが深いのは今の時代で珍しいと思うと同時に、素晴らしいと思った。

自分がやっていることだけでなく、他の人がやっていることも誇らしげに話している人がいて、このような関係性が人と人との繋がりを深くし、一人一人が奥川に誇りを持つことができるのだと感じた。私自身、自分の地元の魅力を聞かれたら答えられるかと考えた時、奥川

の方々のような熱量を持ってお話することはできないと思った。しかしそれは自分の地元のことをどれだけ知っているか、知ろうとしているかの違いだと気づいた。この活動を通して私は自分の地元のことをもっと知りたい、自分の知らない魅力を見つけたいと感じた。

二つ目は、住民の方々にとって郵便局はなくてはならない場所だということである。郵便局での思い出や印象をお聞きした際、「ないと困る」と言っている住民がいるのは大きな信頼が寄せられている証拠だと考える。また、「大きな役所のイメージ」という声もあり、困った時に郵便局を頼りにする方が多いことが分かった。9月に郵便局で局員さんに聞き取りを行った際、「郵便局を困ったときの駆け込み寺のような存在にしたい」と言っていたため、すでに奥川の住民にとって郵便局はそのような場所になっている。何か困ったときにすぐに助けを求められる場所や頼りになる場所があるというのは住民にとって何よりも大きな支えになる。そんな役割を郵便局が果たしていることに、住民から郵便局が愛されていることを実感した。また、住民の方々と局員さんが楽しそうにお話している姿を見て、奥川郵便局がここまで住民の方々に信頼されるようになったのは局員さんの人柄あってこそだと感じた。優しくあたたかく対応する局員さんと郵便局を頼りにする住民の方々の信頼関係は簡単に築けるものではなく、お互いが寄り添い合っているからこそ築けたものだと感じた。

以上のことを踏まえて、奥川郵便局が住民の拠り所として活動の幅を広げていくことが今後の奥川の在り方なのではないかと考える。郵便局に空きスペースがあることやその空きスペースを活用して今回のようなカフェができることは、他の郵便局にはない奥川郵便局の魅力であると私は考える。今回のようなカフェや保健室以外にも、住民の趣味の教室や買い物支援、農産物の販促活動などもできるかもしれない。何か困った時に頼れる役所のような存在だけでなく、郵便局に用事があつてきた人がそのまま気軽に立ち寄れる集会所のような存在になることで、郵便局の持続可能性も高まることが期待される。もちろん簡単なことではない上に、時間も労力も必要になるが、この空きスペースを活用することはきっと奥川に大きな効果をもたらすだろう。

(寺島遥香)

⑩郵便局と住民との距離の近さ

1日を通して、改めて奥川の魅力や人の温かさを感じることができた。奥川の魅力として挙げられたことは、まず奥川は空気が美味しく、土も水も豊かなため米が美味しいということである。米を育てる際の肥料にもこだわりをもっているという農家の方もいらっしゃった。また、高陽山や飯豊山などは登山客に人気で、高陽山からは雲海が見えて綺麗だそう。雪が多い地方なので、除雪車が通る前の雪が積もっている道も綺麗だという意見もあった。かつての岩崎ゼミのプロジェクトで屋号看板をつけたことがあったが、それも今では奥川の魅力の一つになっているという意見もあった。「ここには何もない」とおっしゃっていた方もいたが、逆にその手つかずの自然が良いところだと考える方もいらっしゃった。

また、郵便局にまつわる思い出やエピソードとしては、郵便物や振込をするといった一般的な利用のほか、自分の山で採ったキノコや自分で育てた米を送るなど、奥川の住民ならではの利用の仕方もあった。奥川の方にとって、奥川郵便局は頻繁に利用する施設であり、「局員の方が情報を持ってきてくれてありがたい」、「ないと困る」などの意見が挙がった。

「思い出のポスト」や「奥川魅力マップ」の作成にあたり、住民の方々の意見を聞くことで、様々なことが分かった。まず、住民の方だからこそ知っているような、そこに住まなければ分からない綺麗な景色がたくさんあるということである。奥川にある豊かな自然が育んだ素晴らしい景色は、住民の方も魅力に感じている人が多いようだ。しかし、「田舎過ぎて何もない」と答えていた方もおり、ありふれている自然が当たり前すぎて魅力だと気づかないのではないかと考えた。

また、多くの住民の方が「人の温かさ」について触れており、「人と人との繋がりが深い」ということも奥川の魅力の一つだと感じた。この「人の温かさ」に関しては、郵便局での思い出やエピソードにも裏付けがあり、奥川では住民の方が郵便局に寄ったついでに郵便局員と世間話をするのが頻繁に行われている。奥川は郵便局と住民との距離が近く、温かみのある地域だと思った。

今回の実証実験を通して、過疎地域における郵便局の存在意義や役割について改めて気付くことができた。今回、郵便局の空きスペースに「むらの保健室」を設置したところ、利用者の反応が良く、来ていただいた方全員が血圧を測っていった。また、血圧を測るだけでなく、そこで保健師さんと健康相談をしたり、世間話をしたりする様子も見受けられた。郵便局が集いの場となっている特徴を活かし、空きスペースに「むらの保健室」を設置すれば、住民の方の安心感を担保することができるのではないかと考えた。さらに、可能であれば、今回の「むらの保健室」と併設して、住民の方と外部の方向けのカフェを設置するというのも必要なのではないかと考える。そうすることで、郵便局やむらの保健室の利用者はもちろん、高陽山や飯豊山に登りに奥川を訪れた登山客も利用できる。住民同士、または登山客も含めて気軽に交流できる場になれる可能性がある。

奥川の魅力を住民の方に聞いてみて、自分の地域の景観を多くの方が誇りに思っているのは素敵だと感じた。このように住民の方しか知らないような情報を外部に発信していけば、美しい景色を見ようと外から奥川に来る人が増えるのではないかと考えた。以上のようなことをすれば、奥川に関心を持つ人が増え、持続可能性を高められるのではないかと考える。

(戸倉凜乃)

⑪地元への愛情と郵便局の思い出

第一に、来られた人それぞれが奥川の好きなところや良いところをすぐに出していたことに少し驚いた。前に奥川地区でお話を聞いた時には「良いところはない」「すぐには思いつかない」などの回答が多く、今回も同じような展開になるだろうと予想していたが、思いのほか「高陽山が綺麗」や「手つかずの自然」、「星が綺麗」などの自然にまつわるものの他

にも、「人と人との繋がり」や「奥川米のクラウドファンディング」など多岐にわたってそれぞれの想いが飛び交った。やはり地元への愛情は非常に大きなものだ実感した。しかし、獣害問題などの共通の課題も抱えていることも分かった。特に全国的に問題となっている熊問題については奥川でも同様らしく、「頻繁に見かけるので不安だ」という声も上がっていた。

第二に感じたことは、来店者が少ないということである。そもそもの開催場所が過疎山間地域に位置するうえに、開催日が平日ということもあり、郵便局を利用しに来るお客さんは少なかったように感じた。しかし、「孫カフェ」が行われていると知って、わざわざいらっしゃった方や、他の郵便局から来られた方もおり、奥川では大学生と交流することに意欲的な方も多いのではないかと考えた。その背景には、奥川ではかなり前から外部人材を活用した地域おこしに力を入れていることや、岩崎ゼミが奥川地区に継続して調査を行っていることなどが考えられる。しかしこのような傾向が見られるのには、奥川地区の中でも、地域おこしが特に活発に行われている中町集落が中心で、現に、中町集落以外にお住まいの方は、あまり外部人材の存在を感じないと話している方もいた。

第三に、郵便局は住民の方々にとってかけがえのないものだと感じた。郵便局での思い出をお聞きする作業では、郵便局に対して「はがきを出す」や「振込」などの通常業務に関するもの以外にも、「優しい局員」や「情報を持ってきてくれてありがたい」など、ひいては「ないと困る」と答えているお客さんもいた。奥川郵便局は近辺に住む方々にとっては、通常業務においてはもちろんのこと、精神のより所ともなっている可能性があると考えた。

(西瀬壮太)

⑫「人に会う場所」としての郵便局の可能性

郵便局という小さな建物であるが、奥川に住む住民の方にとっては必要不可欠な場所になっていることが分かった。お金をおろす際、お米を送る際など様々な目的で利用されており重要な存在となっている。また、郵便局の空きスペースは交流の場として利用するのに適している場所であると感じた。郵便局を訪れる人は年齢や性別などを問わない。その点から、世代や性別を超えて交流できる場所になりうるのではないかと考える。

「奥川魅力マップ」の作成では、知らなかった奥川の魅力を多く知ることができた。家の前から見える綺麗な景色や家の近くで見かけたクマの動画などを見せていただいた。どの住民の方も奥川について楽しそうに話して下さったことが印象的である。奥川という地域に誇りを持っておられるように感じた。実際に住んでみないと気付けない魅力がたくさんあることを再認識し、より多くのことを知っていきたいと思った。

「思い出のポスト」の作成では、郵便局を通じた人のつながりを強く感じることもできた。それと同時にこの地域における郵便局の必要性を非常に感じた。インタビューの中でよく聞かれた声として、お金の引き落としや振込はもちろん、家族や親せきにお米や野菜を送るために郵便局を利用しているという声が挙げられた。また、奥川郵便局員の方が荷物の積み

下ろしを手伝ってくれるという話もお聞きした。

一方、課題としては、地域住民全体の人数が多くないこともあり、郵便局を訪れる人が少ない点が挙げられる。現在の郵便局は、住民の方にとって事務的な用事を済ます場所であるというイメージが強い。空きスペースの活用可能性を周知し、コミュニティの場ともなり得ることを伝えていく必要があると感じた。事務的な用事以外に人に会うためという目的をもって奥川郵便局を訪れてほしい。

誰か人に会いたい、話したいという目的で郵便局を訪れてもらうためには、今回のようなイベントを定期的に開催する必要があると考える。私たち大学生が新しいつながりを作るきっかけとなれたら良いと思う。大きな都市ではできないアットホームな郵便局での取り組みが可能なのは奥川郵便局ならではの魅力であるように感じる。小さな地域だからこそその魅力を生かし、人とのつながりを強く感じることが出来る郵便局になってほしいと思う。

そのためにはコミュニティ・カフェ以外にも気軽にかつ来たいと思えるようなイベントを考えていく必要がある。壁に貼ってある「おくが輪写真展」の写真や血圧測定に興味を持ち、それを理由に空きスペースに入ってきてくださる住民の方が多かったことを覚えている。

また、地域全体で福島大学に限らず様々な大学生の活動を積極的に受け入れてくださっていると感じる。住民の方のニーズを知り、そのニーズに答えることを第一に考えて今後継続的な活動を行っていききたい。

(藤田彩希)

第4節 活動の反省点と今後に向けた課題

今年度岩崎ゼミでは、初めてコミュニティ・カフェの取り組みをしたため、いくつかの課題や反省点が見つかった。以下では、カフェ活動を実践してみて気がついた課題を挙げておく。

①事前の周知、広報活動の必要性

今回来てくださった住民の方の中には、義平さんが呼んでくれた方も多かったので、自発的に来てくれるように工夫したい。日程を早めに決めて呼び込んでもらったり、一度来てくれた方が他の住民の方に宣伝してもらったり、また来たいと思ってもらえるような内容を考えていきたい。日程が早めに決まっていれば、広報誌で宣伝してもらったり、義平さんや局員の方々に協力してもらったりして宣伝ができると思う。

郵便局を利用する地域住民の方が、参加しにくい・自分には関係ないという疎外感を感じずに、「自分も参加したい・参加して良い」と思ってもらう必要がある。今回来訪者は男性に偏っており、女性で来て下さった方はいなかった。当日、女性が郵便局を利用しており郵便局の空きスペースを覗いている様子があったが、目は合わず、入ろうという興味はあまり

なかったように感じた。その方のご用事もあると思うが、入りにくい雰囲気や「自分には関係ない」と無意識に思わせてしまう場の雰囲気だったかもしれないと思った。

地域住民の方が交流スペースの重要性を感じ、自ら運営したいと思うようになる必要があるのではないと思う。その前提として大学生側は、より幅広い層の地域住民の方に利用していただくために、事前の周知などに取り組むべきと思った。

②コミュニケーションの取り方

今回難しいと感じた点は、お話の聞き方である。来てくださる地域の方々の人数に対して、学生の人数が多いため少し話しづらい雰囲気になっていたと感じる。

また、話を一方的に聞くスタイルになってしまっていたため、もっと自然な会話の中で地域についてのお話を聞くことで、よりかみ砕いた話ができるようになってしまったと思った。今回が初めての試みであったため、やり方に関しては改善の余地があると思った。しかし、郵便局のスペースを使うという点においては、規模感においてちょうどよかったと思う。また、今回保健師さんと呼んだように、他のイベントを同時に進行することで、参加者にとってもより参加しやすいものになると思う。

③学生側の準備不足、住民への配慮の必要性

学生の改善点として1点目は、地域に関する知識不足である。Hさんのお話を伺った際に、私たち学生が奥川地区のことをどれほど数字として知っているのか問われ、答えられなかった場面があった。人口や高齢化率などについて理解して地域に入らなければ、この活動を通して何を成したり知ったりすることが目的なのか分からず曖昧に終わってしまうため、事前に地域の情報を確認して臨む必要があると思った。

2点目は、「孫カフェ」を運営するにあたり学生が準備できることについてだ。学生が男女に分かれてスペースに座ってしまうことで、話しづらいと感じた住民の方がいらっしゃった可能性があるため、学生が場づくりの意識を持つことも必要だと感じた。また、郵便局利用の妨げにならないよう「孫カフェ」スペースの入り口に看板を置き、何を行なっているのか郵便局の利用者に示したり、声掛けを行ったりなど、地元住民の方が利用しやすい環境を作ることも望ましいと思う。

④複数回の活動の必要性

私たちが住民の方との距離を縮めるためにも年に複数回実施できれば良い。学生が何人かに分かれて行ったり、時間を短くしてゼミの時間を活用したりと調整をしながらできたら良いと考える。

継続して行うためにはまた来たいと思ってもらえるような内容にしておくといけない。「孫カフェ」の最も重要な内容は大学生の私たちとお話することなので、楽しくお話できるように工夫したい。椅子に座って話すとき距離が遠い人もいたので、少人数で近い距離でお

話ができればと思った。また、何を話したら良いか分からない方もいると思うので、私たちが積極的にお話できるよう事前に準備していききたいと思った。「孫カフェ」をより良いものにできるようみんなで考えていきたい。

⑤展示活動の常設化の可能性

今回の実証実験では「おくが輪写真展」や「思い出のポスト」、「奥川魅力マップ」づくりを行ったが、この3つを常時空きスペースに展示できればさらにいいのかなと感じた。

「おくが輪写真展」は、住民の方が持っている写真で展示したいものを自由に持ち込んで、別の人が観覧できるようにするのはどうだろうか。

「思い出のポスト」は、郵便局を利用した方が残しておきたい思い出を書き記してもらうのはどうだろうか。さらに、郵便局に訪れた人や将来の自分に手紙（思い出）を送るという意味も込めて、付箋は手紙型のデザインのものにしたり、郵便局の思い出だけでなく、みんなに話したい出来事などでも貼れるようにしたりすることもいいと思う。

「奥川魅力マップ」は、地域内の人は自分だけが知っている良いところを書き込んでもらったり、地域外の方は奥川に来てみて感じた魅力を記してもらったりするのはどうだろうか。これらを常設することで、用事がなくても住民の方が空きスペースを訪れることでコミュニティが生まれると思う。また、様々な思い出があふれるスペースにすることで、奥川に住んでいた、あるいは関わっていた人たちが懐かしさを求めて郵便局を訪れるかもしれない。写真展、思い出のポスト、奥川魅力マップの常設は郵便局を拠点とした新たなコミュニティ形成の可能性を広げるのではないかと思った。

⑥空きスペースの管理体制と大学生の意識づくり

現在、若者と高齢者の交流機会が減る中で、多様な世代が日常的に関われる場所として郵便局の空きスペースが提供されたら良いと思ったが、その中で気を付けていきたいことが二つある。

一つは空きスペースの管理体制についてである。今回自分たちは郵便局からスペースを貸していただいて開催したが、郵便局が今後、多様な目的に利用されていくようになれば、利用後の現状復帰や備品の管理、安全面への配慮等は徹底していかなければならない。住民の方にもその認識を広め、いつ誰が来ても空きスペースを気持ち良く利用できるようなことが必要だと考える。

もう一つが奥川に関わる大学生の意識づくりである。大学生は毎年人が変わるため、その度に奥川での活動について学びなおす必要がある。現地訪問や過去の事例紹介、そして今回のような活動について知ることは、奥川にとっての利点に限らずに大学生に対しても利点があるため、活動の趣旨を理解していくことが大切だ。今ではなく将来の地域づくりに向かって行われているのだと意識づけることが今後の大学生に求められていると思う。

⑦郵便局を地域コミュニティ形成の場として存続させていくために必要なこと

奥川郵便局は単なる郵便局としての性質をもつのみならず、住民にとっての交流の場でもあり、なくてはならない場所である。また、今回の実証実験が行われたように、今後も郵便局では様々な活動が行われていくことが予想される。しかし、郵便局が民営化された以上予算の関係等もあり、現在のような取り組みを続けられる保証はないとも考えられる。人員削減や営業時間の短縮、営業日の減少など、規模の縮小化を余儀なくされる可能性も大いにあるのではないだろうか。郵便局を地域コミュニティ形成の場として存続させていくためには、我々のような外部人材が定期的に郵便局を活用した交流の場を作る必要がある。今回行った「孫カフェ」でも「むらの保健室」でも、鳥獣被害の対策会議でも何でも良いが、定期的に継続して行えるとよい。そうすることによって郵便局が集いの場、交流の場としての一面を持ちながら、地域活性化に大きく貢献するのではないだろうか。

第4章 調査のまとめと提言～過疎地域郵便局のもつ可能性

本章では、本報告書のまとめとして、西会津町が直面している課題とその解決に向けて郵便局が果たしうる役割・期待について検討する。地域課題については、2021年度報告書の結論を検討したうえで図表8のように整理を行った（注6）。そのうえで、それぞれのテーマに基づき役場や関係者から聞き取りを行った結果をまとめ、課題解決に向けた郵便局の可能性や期待を記載している。

図表8 西会津町の地域課題解決に向けた3つの柱

<u>(1)「生活支援活動」(少子高齢化の進行による生活面での課題解決)</u>
・DX推進による住民の交通手段の確保 ・高齢者の健康づくり ・地域住民の生きがいづくり
<u>(2)「コミュニティ支援活動」(集落の共同作業や行事などの支援)</u>
・関係人口の広がりや深化に向けて ・地域の歴史的建造物や伝統行事の保存とこれから ・奥川地区の危険箇所の解消と災害対応
<u>(3)「価値創造活動」(地域資源を生かした地域づくり・地域活性化)</u>
・農産物のブランド化～ミネラル野菜の担い手育成 ・観光人口の確保・拡大 ・地域内外への情報発信のあり方

第1節 「生活支援活動」(生活面での課題解決)に向けて

(1) DX推進による住民の交通手段の確保

①テーマを設定した理由・背景

高齢化が進む地域にとって、高齢者の移動手段の確保は非常に重要な課題である。住民の方にお話を伺うと、スーパーまでは車で20分かかり、欲しいものによっては新潟まで買い物に行くこともあるとおっしゃっていた。徒歩や自転車を利用し買い物に行くには難しい立地である。このような環境のため、奥川地区では移動販売が行われている。移動販売を利用する住民の方はかなり多いそうだ。スーパーで購入するよりは高くなってしまふものの、食材や日用品を簡単に購入することができる。週に2回ほど移動販売車がやってくるとお聞きした。

しかし、食材や日用品は移動販売でまかなうことができるものの、病院や町役場などの公

共施設へは自らの移動が必要となる。高齢者にとって自分で車を運転することは年々難しくなっていくため、公共交通機関の利用が必要になる。しかし、全国的に利用者の減少により公共交通機関のサービスは低下している。

その中で、奥川地区でのフィールドワークに参加した際に、集落支援員の岩橋義平さんから、西会津町には「バーチャル停留所」というシステムがあり、アプリを使って自分の都合の良い場所にバスを呼ぶことができるという話をお聞きした。便利なシステムだと感じたが、高齢者の方がうまく利用できるのか疑問に思った。また、それに関連して西会津町はデジタル化に力を入れている自治体であることを知り、高齢化率が高い自治体で、どのようにデジタル化を進めているのか、バーチャル停留所（AI オンデマンドバス）の現状や課題、住民がデジタル化についてどう考えているのかに関心を持ったため、このテーマを設定した。

②調査内容のまとめ

i. 「西会津デジタル戦略」の概要

まず、西会津町で行われているデジタル化を利用した取り組みについて、西会津町役場企画情報課の I さんからいただいた説明と西会津町デジタル戦略の内容を基にまとめていく。



西会津町では、デジタル技術等を活用して町民の暮らしをもっと豊かにするために、2020（令和2）年に「西会津町デジタル戦略」を策定した。内容は以下のとおりである。

「人口減少によって、西会津町では今後、集落機能の維持が困難な自治体の増加、高齢化に伴う医療・福祉分野等の担い手不足、小売店の減少など地域経済のさらなる縮小と

いった課題が顕著になるものと予想されている。このため、ケーブルテレビ情報通信基盤等を活用した快適で便利な暮らしづくりをはじめ、地域経済活性化、雇用の創出、農林業の生産性・所得の向上、担い手の育成、移住促進、さらに、教育、保健、医療、福祉分野などでのデジタル技術の活用による町の将来像の実現に向けてデジタル戦略を策定する。」（「西会津町デジタル戦略」2020）

西会津町のデジタル戦略は国に先駆けて進められたものであり、I さんは西会津町がデジタル戦略を早く進めることができた理由として、「ケーブルテレビの存在が大きい」と語っていた。西会津町にはケーブルテレビ局があり、西会津町の 95%以上の世帯がケーブルテレビに加入している。西会津町のケーブルテレビはインターネットの接続サービスも行っ

ているため、西会津町のほとんどの世帯でインターネット環境が整備されているのである。こういった背景から、西会津町ではデジタル戦略が早期から進めることができた。

ii. デジタル化の促進に向けた取り組みの具体例、事業展開

a. デジタル教室の開催

スマホやタブレットを利用できる住民を増やすため、西会津町では様々な取り組みが行われている。まず、不定期で「デジタル教室」が開催されている。西会津町企画情報課が主催しているもので、町民の方にスマートフォンやタブレット端末などの使い方の解説や操作を体験してもらうという内容になっている。自治区(集落)から要望があった際に開催され、町が単独で開催するだけではなく、企業と共同で開催することもある。現在までに 50 回以上開催されており、参加者の平均年齢は 80 歳以上であることがほとんどである。

また、「デジタルよろず相談室」という、デジタルはもちろんそれ以外の様々な相談ができる相談室も開設されている。例えば、携帯料金の見直しのために携帯会社に住民の方と一緒に電話をするなど、高齢者をサポートしている。野沢まちなか再生拠点「ぶらっと」で週に 1 回開催される。相談件数は、2021 年は 50 件、2022 年は 100 件、2023 年は 200 件と年々増加している。

b. AI オンデマンドバス交通（バーチャル停留所）

AI デマンドバス交通の概要と導入の背景については、「西会津町デジタル戦略」では以下のように説明されている。

「オンデマンドバスは、一般的に路線バスとタクシーの中間のサービスに位置づけられる。AI を活用し、需要に合わせて AI が策定したルート・ダイヤで運行する AI オンデマンドバスは、近年、地域や観光地の移動手段の確保・充実、公共交通機関の維持・活性化などを目的に全国で実証実験が展開されている。AI オンデマンドバスの導入により、バーチャルバス停留所を設置することも可能で、バス利用者はより便利な場所でバス乗降ができるほか、電話に加えスマートフォンによる予約システムを導入することで、利用者が乗車する時間を確認できる、運行するバスの現在地を確認できるといったことなどが可能で、これにより、観光客の二次交通としても利便性向上を図ることができる。また将来的に、町ケーブルテレビデータ放送での予約システムも検討することができる。」（「西会津町デジタル戦略」2020）

現在、西会津町では「西会津町デマンドバス こゆりちゃん号」というオンデマンドバスが予約できるアプリも配信されており、町民だけでなく観光客も利用することができる。利用者登録をした町内の人で、前日に予約をした人であれば、中学生以上 69 歳以下なら 200 円、小学生と 70 歳以上の住民なら 100 円と利用料金が非常に安い。町民の方が利用しやすいように、利用料金を上げる予定はないそうだ。

西会津町は高齢者が多く、免許を返納される方が増えているという背景から、オンデマン

ドバスの利用率が高まっている。町民の方に関しては、アプリ（バーチャル停留所）を利用して予約する方は1、2割ほどで、電話で予約される方がほとんどだという。バーチャル停留所の認知度自体も、集落によって差があるのが現状である。

デジタル戦略を進める上での懸念と対策に関して、Iさんは「デジタル化はあくまで手段であって目的ではない。デジタルをもって、住民の生活をよくすることを目的としている。その時々によってデジタルとアナログを使い分けることも必要」と述べており、デジタル化を進めること自体が目的になってはいけない、その点を特に意識してデジタル戦略に取り組んでいることが分かった。

iii.AI オンデマンドバスについて、住民への聞き取り調査

次に、極入集落の祭礼に参加されていた住民の方に行った聞き取り調査の内容についてまとめていく。聞き取り調査に協力していただいたのは、極入集落に住む80代男性である。バーチャル停留所というシステムを知っているかと尋ねたところ、「聞いたことがない、ただ、デマンドバスは電話で予約してよく利用している」とのことで、デマンドバスの予約方法に関しては、「スマートフォンは持っているが、電話連絡ぐらいしかできない」とお話しされていた。

デマンドバスの利便性、改善してほしいところについては、「電話で予約すれば自宅の前まで来て、町内ならどこへでも行くことができるため、助かっているし、ないと困る」とお話されていた。また、観光客も利用できるため、「そういった意味でも良いと思う」という意見をいただいた。最後に、デジタル化に対する不安や考えていることについて尋ねたところ、「若い人のように（デジタル機器を利用すること）はできないが、（デジタル化が進むことに）特に不安はない。むしろ便利なものは取り入れるべきだと思う」という意見をいただいた。

③調査をしてみて考えたこと・感想

住民への聞き取りでは、デジタル化が進むことに対して住民はそこまで不安に思っていないように感じた。それは、自治体が「住民の生活をよくする」ことを第一に考え、デジタルとアナログを使い分けていること、デジタル教室などで住民のデジタルに対する苦手意識を薄める取り組みをしていることが大きいと考えられる。無理にデジタル化に対応させる必要はないが、奥川地区でもスマートフォンを利用している高齢の方をよく見かけるため、デジタル機器の使い方やできることを解説、体験しながら苦手意識を薄める取り組みを奥川郵便局の空きスペースでできないかと思った。

多くの住民がスマホ・タブレットを活用できるようになることで、AI オンデマンドバス「こゆりちゃん号」の利用数は増加するだろう。オンデマンドバスはスマホから予約できるようになることでさらに便利な交通手段となる。スマホから予約ができること、便利であることを広く伝えていくことが利用数を増やすための一番の近道であると思う。AI オンデマ

ンドバスを活用し、町民全員が行きたいときに行きたい場所へ向かうことができる地域になってほしい。また、外出することにより生まれるコミュニティも多いだろうと考える。地域の中でコミュニティがひろがり、より住みやすい地域になってほしい。

④郵便局のもつ可能性

今まで役場で行っていた教室や相談室にプラスして、奥川郵便局の空きスペースでも住民向けのスマホ・タブレット教室が開催できるのではないか。飛び入り参加も可能とし、郵便局に事務的な用事で訪れた人も参加できるようにする。普段利用する郵便局で開催することで、今まで開催していた教室は参加しづらいと感じていた人や、会場まで向かうのが面倒だと思っていた人でも気軽に参加できるのではないだろうか。

一部の自治体の郵便局ではこうした取り組みが実施されているため、まず、その先行事例について紹介する。

静岡県湖西市の郵便局では、郵便局の待合スペースを利用して市民のデジタル活用をサポートする取り組み、「近くで学ぶ！スマホ操作@郵便局」を2023年7月から実施している（注7）。具体的には、スマートフォンの操作や住民票などの証明書の電子申請に関する困りごとをサポートしており、無料で実施している。湖西市では、「企業シャトル BaaS」という湖西市内の企業が運行するシャトルバスを市民も利用可能にする取り組みも実施しており、予約は必要だが料金が1乗車100円と非常に安価である（注8）。この企業シャトルバスの予約方法も湖西市内の郵便局でサポートしてもらうことができる。湖西市は西会津町と同様にデジタル戦略に力を入れている自治体である。行政の重要政策と郵便局が連携することで、郵便局が住民のデジタルに対する不安や苦手意識を薄める場や機会を増加させることにつながっている。

2018年に総務省の郵便局活性化委員会がまとめた「超高齢化社会に期待される郵便局のあり方」の中で、高齢者にデジタル機器の利用方法を教える取り組みをしている「老テク研究会」の事務局長近藤則子氏は「デジタル情報端末・サービスで困ったときに相談できる窓口機能を担ってはどうか？」という提案をしている（注9）。湖西市の郵便局の取り組みはまさにそのような機能を果たしており、今後デジタル化が進展していく中で全国の自治体でもこうした取り組みの需要は高まるのではないかと考える。西会津町ではその機能を自治体が担っているのが現状であるが、郵便局と連携することで、デジタルに不安を持っているが自治体主催のデジタル教室に参加していない人でも、郵便局を利用した際に気軽に相談できる、或いは相談するきっかけをつくることにつながるのではないだろうか。

これらのことを踏まえて、住民のデジタルに対する苦手意識を薄めるために、奥川郵便局でどのような取り組みをするのかについて述べていく。内容はほとんどデジタル教室やデジタルよろず相談室と同じだが、郵便局員や大学生がサポートしながら、スマートフォンやタブレットの使い方を学び、最終的には住民自らがSNS等で奥川地区の魅力を発信する。さらには使い方を学んだ住民が今度は教える側になり、住民同士で教え合うような環境に

したい。それによってデジタルに対する苦手意識を払拭し、楽しいという印象を持ってもらう。魅力の発信に関しては、新しくアカウントをつくることから始めるか、西会津町やHさんなどの発信力の強いアカウントと連携することで外部から人を呼び込み、地域の活性化につなげる。

ただ単にデジタルに対する苦手意識を克服するのではなく、デジタルを活用して地域に貢献することで、デジタルの楽しさと地域づくりのやりがいを経験できる、そういった機会を奥川郵便局の空きスペースを活用して提供できれば良いのではないか。それによって、「デジタル情報端末・サービスで困ったときに相談できる窓口機能」だけではなく、デジタルを活用した地域づくりの拠点としても奥川郵便局を活用できると考える。

(兼子唯杜・藤田彩希)

(2) 高齢者の健康づくり

①テーマを設定した理由・背景

農山村地域では高齢化が進んでおり、地域住民の健康を守るための活動が不可欠である。住民の健康を守るためにはサロン活動などの健康増進を目指す取り組みが必要だ。

しかし、我々が地域を訪問した際、外を出歩く住民は少なく、すれ違う人はほとんどいなかった。ひとけの少ない町の雰囲気は閑散とした印象があったが、夏季に祭を手伝う際に訪れたときは、地区住民の方々はとても活気にあふれていた。そこで、地区住民の出歩きの推進に加え、健康の維持に向けて必要な取り組みについて調査するため今回のテーマを設定するに至った。

②調査内容のまとめ

i. 「100歳への挑戦」のその先へ

西会津町では、「100歳への挑戦」をキャッチフレーズに寿命を延ばそうと講座を開いている。「100歳への挑戦」とは、以前は脳卒中が多く長生きできない町であったことから、1993(平成5)年から実施されてきた施策であり、保険・医療・福祉の連携によるトータルケアを推進していた。また、2020(令和2)年には「幸せになる健康づくり～『100歳への挑戦』のその先へ～」をキャッチフレーズにした「西会津町健康増進計画(第2期)」が策定された。そこでは、「さすけねえわ(輪)」「からだ、こころ、つながりの3つの健康」の健康づくりによる健康指標の改善を図っている。例えば、食塩摂取量の減少や喫煙率の減少を数値目標として設定しており、さらに具体的な計画となっている。

ii. サロン活動の展開

西会津町では心の健康、体の健康、つながりの健康の三つの健康づくりに取り組んでいて、

サロン活動はその取り組みの一つである。サロン活動は、各集落の区長や民生委員が一人暮らしの引きこもりをなくすために始めたのがきっかけで、参加者は 15、16 人程度が多く、頻度は 1、2 か月に 1 回である。社会福祉協議会が年 1 回 1 万円の補助金を全 63 のサロンに給付しており、座椅子の貸し出しもしている。さらに、クーラーのない集会所にはコミュニティ補助金を活用してクーラーを入れてもらうことができる。集会所には Wi-Fi も入っており、ネットの利用もできる。サロン活動は参加者から好評で、「次こういったことをしないか」「花見に行こう」などという前向きな意見が出てくるという。

サロン活動の内容は多岐にわたっており、食事会や歴史の勉強会、クリスマス会、誕生会、DVD 鑑賞、警察官からお話を聞いたり、救急車の呼び方を学んだりしている。また、運動不足解消のため、ボッチャ、ストラックアウト、ゲートボールなどのニュースポーツ（高齢者でもできるスポーツ）をしている。

サロン活動の課題は 2 点ある。1 点目は男性が出てこないことである。サロン活動の参加者はほとんどが女性であり、男性の参加者は少ない。引きこもりをなくすというサロン活動の目的達成のためには、男性の参加者を増やすことが必要である。考えられる解決策は、活動に男性が好む内容を組み込むことが挙げられる。例えば、お酒を飲むことや麻雀、将棋などをすることが考えられる。しかし、こういった内容を組み込むことで、今度は女性が活動に出てこなくなる可能性がある。

2 点目は参加メンバーの固定化である。サロン活動に出てこない人は全く参加しないというメンバーの固定化である。

次に、高齢者の外出の機会としては、例えば、2023 年 8 月に、住民の方と美大生がシャッターに絵を描く活動をした時に、屋台を設置し美大生とおしゃべりをしながら、お茶のみをできるよう整備したところ、多くの住民が集まったとのことである。また、地区住民の高齢者はラクターを使用しており、地区住民の交流の場としては地区内のお店が役割を果たしているとのことである。

③調査をしてみて考えたこと

集落のサロン活動に対して様々な補助金が出されていることが印象に残った。集会所にクーラーの設置がされるための補助金が出されているのは、高齢者の健康のために必要だと思った。近年の猛暑は熱中症や脱水症状を引き起こし、特に高齢者はリスクが高い。そういったリスクを低くするための補助金で、適切だと思った。

男性が出てこないことに対する解決策を施すことで、女性が出てこなくなる課題が発生するという話を聞いて思ったのは、男性と女性が出るサロンをそれぞれ作ればよいのではないかということだ。引きこもりをなくし健康でいられる人を増やすためには、男性が来やすいサロンも開けばよいと思った。

また、義平さんは 1 日 1 万歩を目指し遠回りをしつつ集落内を歩いているが、地区住民とすれ違うことはほとんどないという。サロンや健康づくりのための講座は開いてはいる

が、開催数はまちまちであり、毎日開くことは難しい。奥川地区ではお店が会話の場となっているとのことだが、年中開いているわけでないことから、いつでもいけるような会話の場を設置できたらいいのではとないかと考えた。

④郵便局のもつ可能性

はじめに、郵便局の空きスペースを利用してサロン活動をすることを検討する。奥川郵便局の空きスペースではDVD鑑賞は十分可能だが、運動は少人数かつ軽い体操程度でなければできないと推測される。将棋や麻雀をするのであればそのスペースはあるため、男性の参加しやすいサロン活動を郵便局で開くことは可能である。

例えば、第1章第4節で紹介した山口県周防大島町の麻雀教室の開催は、引きこもりがちな男性高齢者の参加者数を増加させた。健康マージャンと称して、「お金をかけない・酒を飲まない・たばこを吸わない」という健康を増進しつつ、交流の場を設けることは農村地域の集落維持に良い効果をもたらすだろう。

課題としては、郵便局へのアクセスが悪い住民がいることである。郵便局から距離のある所に住む住民は徒歩で来ることが難しく、送迎してくれる人がいるときや、車を運転できる人でないと来ることができない。近年、導入が進められているオンデマンドバスなどの利用が解決策として考えられるが、バスの利用方法、存在自体の周知などが必要となる。加えて、バスの予約にスマートフォンが必要であれば、高齢者にスマートフォンの使い方を教える講座なども開く必要がある。

サロン活動に出てくる人、出てこない人が固定化しているという点に関しては、郵便局がその解決の役割を担える可能性がある。なぜなら、サロン活動に出ていない人の中には、郵便局に年金の受け取りや荷物の発送・受け取りなどで訪れる人がいると考えられるからだ。用事で郵便局に来る機会をとらえて、学生との「孫カフェ」や楽しいと思える活動の場を提供することが引きこもりをなくす糸口になり得るかもしれない。気軽に行けるイベントを開催することで、従来のサロン活動に来ない人を呼び込むことができるのではないかと。

このように、郵便局の空きスペースは、住民同士のコミュニケーションの場となり得る。それに加えて、郵便局員によるオンデマンドバスの予約の手助け、バスの待ち時間をつぶす場所、定期的にサロンのような活動をするにより空きスペースを多機能的な空間として運用できるのではないかと。こうした空間を作ることにより、地区住民の外出促進や引きこもりや認知症予防、コミュニケーションの活性化等の効果を期待したい。

しかし、こうした空きスペースの活用には、空きスペースの責任者を誰に任せるかという課題がある。郵便局員の方々にとっては業務外の仕事となり負担が大きくなってしまう。管理体制についてはさらなる考察の余地がある。

以上のように、郵便局の空きスペースは、奥川地区および周辺地区の足りない機能をカバーしつつ、住民同士のコミュニケーションの場として提供するといった可能性をもつ。住民の健康維持に良い効果をもたらし、生活の利便性を高めるため、今後も、郵便局の活用につ

いて幅広い可能性を考察していきたい。

(伊東拓真・田多羅瑠貴)

(3) 地域住民の生きがいづくり

①テーマを設定した理由・背景

当ゼミは奥川地区に長く関わらせていただいております、具体的な地域の課題は2021年度報告書にも様々に記載されていた。しかし、2023年に初めて奥川地区に関わった身として、課題に目を向ける前に住民の方や奥川での暮らしについて知りたいと思った。そのため、住民個人の方について伺いながら深めることができ、且つ地域課題を解決する際の理想の状態を考えテーマに設定した。テーマのイメージは、個人が生きがいを持って生き生きと暮らす延長線上で、地域課題の解決ができるようにするためにはどうしたら良いのか、概観を得ることだ。

②調査内容のまとめ

奥川地区で行ったフィールドワークや祭礼へ参加した際、4名の地域住民の方にお話を伺うことができた。地域住民の方がどのように暮らし、奥川に対してどのような思いがあるのか、個人を知ることによって奥川地区への理解を深めることができると考え、個人に注目した質問事項を設定した。以下では質問項目と聞き取りの内容を記載する。

i. 質問項目

i-1 好きなことや趣味はありますか、その内容を教えてください。

i-2 上記に関連し、好きなことを活かして奥川地区で行なってみたいことはありますか。

i-3 地域(奥川地区)で生きていて良かったと思えるときはありますか、それはどんな時ですか。

i-4 奥川地区で行っている活動や、以前行っていた(コロナ等でなくなってしまった)魅力的な活動はありましたか。

質問の意図は、住民の方自身について知り、個性を地域で活かす方法を考える手掛かりを得ることだ。配慮した点は、「生きがい」と聞くと人に誇れるものを答えなくてはならないと思わせてしまう可能性があるため、生きがいという言葉あまり使わずに話を伺ったことだ。

ii. 聞き取り結果

聞き取りを行った一人目の岩橋義平さんと二人目の渡辺貴洋さんは、奥川地区に訪れる学生や奥川地区で新たな取り組みをしたいと考え訪れる人の窓口的役割を担っている。義平

さんや渡辺さんを糸口に新しい事業や人との繋がりが生まれている。三人目と四人目の地域住民男性 J さん・K さんは、極入地区の金蔵寺で行われた大聖歓喜天祭礼でお話を伺った方々だ。J さんは地区内で一番若い 65 歳の男性だ。お二人とも快くお話を聞かせてくださった。以下では質問項目の番号と照らし合わせて、各方の回答を記載する。加えて、質問事項の内容以外でお聞きできた興味深い話についても記載する。

〈インフォーマント一人目：岩橋義平さん〉

i-1 の質問には、若者と話すことで自分の考えとの違いが分かり楽しいとおっしゃっていた。若者と接する時は、違う者同士であることを前提に、近づきすぎない・無理に寄り添おうとしないことなどを意識しているようだ。

i-2 の質問では、「自分がしていることを楽しむという姿勢を維持しながら、現在行っている活動を続け（活動の幅を）広げていきたい。また、奥川地区で上手くいったことは他の地域にも広めていきたい」とおっしゃっていた。加えて、大学生たちとの交流を続けていきたいとおっしゃっていた。

i-4 の質問では、以前開催されていた「奥川健康マラソン」について話して下さった。奥川健康マラソンは自分たちが盛り上げる祭りだと認識してやっていたそうだが、コロナの流行を背景に間が空いてしまったという。空白の期間があると、やろうという気力が減ってしまう。楽しかった思い出はあるが、イベントに手伝いなどで顔を出すのは腰が上がりにくいこともあるのではないかとおっしゃっていた。

義平さんは、以前は今より大変静かな性格だったという。昔から大事にしていた「友達を大切にする」ことが今も生きているとおっしゃっていた。自分から語り掛ける、細かな挨拶をするなど、自分を活かしているようだ。

〈インフォーマント二人目：渡辺貴洋さん〉

i-2 の質問に対して、地域住民の方が主体的に動くならば、自分たちが主体的に動くよりもそのサポートをしていきたいとのことだった。

i-3 の質問では、渡辺さん自身がおばあちゃん子だったので暮らしやすく、また言いたいことが言える環境だとおっしゃっていた。

〈インフォーマント三人目：極入集落男性住民 J さん〉

i-1 の質問に対して、野球が好きだとおっしゃっていた。以前は奥川で野球チームがあって 10 年以上やっており、また野球観戦にも行っていたようだ。

i-3 の質問では、自然が豊かであり、小さい頃から住んでおり安心するとおっしゃっていた。東京に住んでいたこともあるが、子どもを育てるなら奥川の方が良いと感じたそうだ。近所付き合いがあり温かいという。

i-4 の質問には、義平さんと同様に以前開催されていた奥川マラソンについて話してく

ださった。健康マラソンの運営は J さんが所属する地域組織の「へとへとクラブ」が行っていたそう。運営の管轄が役場に代わり、その後コロナの影響で開催がなくなってしまった。歳を取ったのでやりたくなかったという思いもあるという。

部落の中で集まり、話したり食事をしたりすることもあるそう。人足の際も集まっている。「この部落にいる以上、人足はやっていかなければいけない」と話してくださった。

J さんは県道の除雪を 30 年以上しているそう。「西会津は除雪が上手だと言われている」と話してくださった。捌ける場所が多いから綺麗にできると仰っていたが、土地の好条件に加えて J さん自身が長く勤めてくださっているからではないか。若い人がいないため、引き継ぎたくても引き継げないとおっしゃっていた。

〈インフォーマント四人目：極入集落男性住民 K さん〉

i-1 の質問に対しては、「寝ることくらいではないか」とおっしゃっていた。以前はずっと山仕事をしたり、木工のろくろをしたりしていたそう。また、畑仕事もしていたが、現在は自分で食べる用に育てているそう。「白菜・キャベツ、ナス、きゅうりなど、なんでもやっている」と話してくださった。

歓喜天を下った先にある金蔵寺の横のひまわりは、K さんが一人で育てているそう。鳥に種を食べられてしまわないよう、ひまわりが自然と種を落とす前に、種を落として土の上で位置を直しておくのがこだわりのやり方だとおっしゃっていた。

③調査をしてみて考えたこと・感想

義平さんと渡辺さんは、仕事に地域で暮らすことの生きがいを見出していると思われる回答だった。義平さんの性格の変化はポジティブな変化であり、好きなことを活かすことが地域への貢献になり、良い循環が起きていると考えられる。しかし、地域住民の中で活動的な人物は少数派であることは考慮しなければならない。

住民の方からは主に生活に関するお話をお聞きした。J さんが行っている除雪作業は、誰かが必ずやらなければいけない仕事であり、非常に助かる仕事だ。大変でありながらも長く続けているのは、引き継げる人がいないことに加えて、地域住民の生活を守っている責任感などの思いがあるのではないかと思った。K さんが育てているひまわりも、集落に綺麗に咲いている様子を見ることに加えて、見た人が喜んでいる姿が嬉しいといった思いから続けられる仕事だと考えられる。

話を聞き、大変ながらも地域の仕事を真心込めて行っていることが伝わってきた。地域の仕事をそれぞれに担う支え合いが、生きる上で必要な「アテンション（ねぎらいのまなざしを向けること）」（注 10）を与え合う役割をしていることは確かであり、それが地域特有の温かさや中山間地域である奥川で暮らす良さに繋がっていると考えられる。地域での仕事を担うことが、様々な要因を通じて生きる原動力を生んでいるのならば、地域と個人の良い循環だと考えられる。生活の内のどの部分が、個人にとって楽しく、やりがいを感じるかなど

を知り、それをより良く増幅させるために必要なことを考えることが重要である。

④郵便局のもつ可能性

上記の聞き取りと考察を通して、郵便局の空きスペースを展示のスペースとして活用することを提案する。聞き取りを通して、奥川の温かさは住民同士の繋がりからきていると感じると同時に、人の流出などで繋がりが薄れがちであると思った。直接顔を合わせる機会が減ったとしても、他の住民の方が暮らしている様子を感じることができれば、孤独感が減るのではないかと。また、人の魅力や地域の魅力が伝わる展示を行うことができれば、奥川地区の良さを再発見し見つめ直す機会を作れるのではないかと考える。

具体的な展示内容は、地域住民の方にお話を伺い、取り組んでいることや大切にしていることなど、個人に着目した記事の展示だ。当ゼミの学生が調査した祭りの歴史や現在の運営状況、またミネラル野菜の栽培など、地域の方が行っている裏には、大変ながらも続けている理由やこだわって取り組んでいることなど、様々に興味深いことがある。今回お話を伺った、地域男性住民 J さん・K さんの除雪やひまわり栽培のお話も、住民の方からすれば日常の話かもしれないが、学生の視点では地域で暮らす温かみを感じる話であった。一方で、人足の人手不足など課題の重要性にも気づくことができた。

展示に向けた聞き取りの中で気づく課題があれば、学生が今後のゼミを通じて、課題の解決に向けた取り組みを考えることも可能だ。学生が地域住民の方に聞き取りを行い、個人に着目した記事を展示することが上記の案だ。加えて、実証実験で行った「おくが輪写真展」も行いたい。今回の聞き取りや当ゼミの学生が調査した内容からも、金蔵寺隣のひまわりや雪景色、祭りや野菜栽培など、写真に収めたいことが様々にあった。加えて、実証実験の「奥川魅力マップ」で地域住民の方に教えていただいたお気に入りの場所などを撮影し、展示を行いたい。

郵便局は、贈り物や年金の受け取りなどの事務的な用事で訪れる機会が必ずあり、その機会が少しでも楽しみになるようなことができれば良いと考え、展示スペースの実施を提案した。個人に着目した記事や地域の写真の展示を行うことで、人と地域の魅力を改めて感じ、奥川への誇りを感じられる場所を作ることができるのではないかと考える。また、展示という小さな取り組みが、事務的な用事だけを行う場所という郵便局の認識を転換させ、空きスペースの更なる有効活用につなげられたら良いと考える。

(菅野史織)

第2節「コミュニティ支援活動」(集落での課題解決)に向けて

(1) 関係人口の広がりや深化に向けて

①テーマを設定した理由・背景

奥川地区では、地域おこし協力隊や大学生などの関係人口の受け入れを積極的に行っている。しかし、外部の人間が集落に入り、関係を持つということは簡単なことではなく、その土地の環境や住民が外部の人間に与える影響は様々ある。一般的に、外部の人間が小さな集落に入ると、孤独感を感じたり、住民に排他的な態度を取られたりすることも少なくない。

外部の人間を積極的に受け入れている奥川では、外部の人間が集落に入ること、住民は関係人口と関わることに對してどのような考えを持っているのか、また関わる前と後で意識に変化があったかどうかを知りたいと思い、このテーマを設定した。さらに、この聞き取りを行うことで、今後関係人口と住民がどのように関われるかについても考察した。

②調査内容のまとめ

i. 町集落支援員 岩橋義平さんへの聞き取り調査

関係人口と住民の関わり方を考察するにあたり、町集落支援員である岩橋義平さんにお話を伺った。まず、大学生とどう関わっていきたいかとお聞きすると、「大学生とは楽しく交流していききたい」とおっしゃっていた。また、「大学生と話す活力をもらえるので一緒に地域を盛り上げたい」という前向きな意見も頂いた。

次に、今後行ってみたいイベントはあるかと尋ねたところ、「若者が来てくれるだけで楽しいので、どんなイベントでも構わない」とおっしゃっていた。また、「自分たちはもう高齢なので、大学生にどんどんアイデアを出してもらいたい」と、住民の年代を考慮した現実的な意見も頂いた。

大学生と関わっていく中で自分たちの意識などに何か変化があったかどうか質問すると、「変化はあったと感じる」とおっしゃっていた。義平さんの住む中町集落は、最初から外部の人を受け入れることについては抵抗がなかったものの、特に前向きな意識もなかったようだ。中町集落が外部の人と関わりを持ち始めたのは、社会人の人足ボランティアである。住民の方は賛成も反対も特になく受け入れたが、実際に若い人と交流してみると、「楽しかった」「孫みたいで嬉しい」というポジティブな感想を持つ人がたくさんいたそうだ。また、ボランティアの人たちの名前を聞いて、「うちの孫と同じ名前だ！」と、話が弾んで仲を深める住民が多数いたらしい。その後、人足に参加した社会人が友人を連れてくるなどしていくうちに、次第に学生も増えるようになった。中町集落は、そのようにして学生が増えた後も特に拒否することなく受け入れたようだ。初めからよその人に抵抗はなかった中町集落の住民だが、一度関わりを持った後は「むしろもっと関わりたい」というように前向きな意識を持つように変化していった。このような前向きな意識の変化があったことは非常に興味深く、この地域の住民がもつ特性なのだろうと思った。

ii.地域おこし協力隊員 渡辺貴洋さんへの聞き取り調査と夏の人足体験ツアーから

地域おこし協力隊員の渡辺貴洋さんにもお話を伺うことができた。渡辺さんは、3～4年前から「西会津町集落拠点施設 結～yui～」を管理している。最初に、協力隊として地域に来た際、隣りのおばあちゃんや、ほかの集落の方が、玄関前に野菜を置いていってくれたり、「奥川での生活は慣れたか」などと話しかけてくれたりする場面が多々あったとおっしゃっていた。以前、人足体験ツアーで「結」に宿泊した際も、玄関前に野菜が置かれていたため、このようなことは日常茶飯事なのだろうと思った。

続いて、大学生などの外部の人が奥川に来ることへのマイナスな反応はあるのかお聞きしたところ、「集落というより個人として負担に思っている人がいる」とおっしゃっていた。人足の手伝いをしてもらった後に、もてなさなければならぬという義務感をもっている人が一定数いると感じているそうだ。渡辺さんは、「もてなそうという気持ちは非常にうれしいが、負担になってまでやろうとはしてほしくない」とおっしゃっていた。そして、ほかの



集落での大学生などの受け入れが広がっていないという原因は、もてなさなければならぬという義務感にあるのではないかと考えているそうだ。

私が夏の人足体験ツアーに参加した際にも、住民の方と様々な話をさせていただ

いた。参加させていただいたのは、道目という集落で、この集落は、高齢化に伴う人口減少のため、住民の方のみでの地域の維持が難しくなり、今回初めて人足の受け入れに踏み切った集落である。作業を一緒に行った地域住民の方は全員 70 代～80 代の男性であった。

作業を行っている中で、「大学生みたいなほかの人に手伝ってと頭を下げるようになるとはなあ」という住民の方の発言が印象に残った。私たちを受け入れることへ批判的な気持ちは感じなかったものの、自分たちの力では維持するのが難しくなってしまったことに対する悲しさのようなものが感じられた。

③調査をしてみて考えたこと・感想

i.集落支援員 岩橋義平さんのお話から

聞き取りを行う前までは、外部の人間が集落に入ると、住民が排他的になったり外部の人

間が疎外感を感じたりしやすいのではないかと思っていたが、中町集落はそうではなかったということに驚いた。また、打ち解けるのにも時間を要したわけではなく、来た人を歓迎してすぐに仲を深めていたことが分かり、住民の心の深さを感じ取れた。郵便局で実証実験を行った際にお話をした方々も皆優しく接してくださっていたため、人が温かいのは中町集落だけでなく、奥川地区の住民にも共通することなのではないかと感じた。

また、最初は外部の人間と関わることにについて特に何も期待していなかった住民たちが若者と関わることで、「また来てほしい」というポジティブな方面へ意識が変化したことも興味深い。初めから外部の人間に対してマイナスなイメージを持っていなかったわけであるが、実際に関わってからそのイメージが悪い方向へ向かうのではなく、良い方向に向かった。これは、奥川の住民の大きな特徴であるといえる。ただし、すべての方に共通するというわけではなく、外部の人間を受け入れることに対して抵抗がある方もいるだろう。あくまでも、奥川には外部の人を積極的に受け入れる方が多数いるということである。

さらに、若い人と楽しく関われるならどのような企画でも良いという前向きな意見もいただいた。80代の住民が多い中で、その方たちが企画立案をして先頭に立って何かを行うというのは、体力的にも精神的にも難しいため、今後一から立ち上げて何かを行う企画などは、大学生などの関係人口が積極的に案を出していくことが望ましいと考えた。

ii. 地域おこし協力隊 渡辺貴洋さんのお話と夏の人足体験ツアーから

渡辺さんのお話から、大学生などの外部の人間が奥川地区を訪れることに対しての地域住民の方の反応を伺うことができた。福島大学の学生以外にも美大生、医学生、大学の教授など多岐にわたる分野の人たちが奥川に訪れていて、そのことが住民の間で話としてあがるということが分かった。実際、何度も奥川に足を運んでいるが、直接お話をさせていただいたことのある住民の方は少ないため、これからは調査を継続することで、住民の方をもっと知っていきたいと思った。



また、外部の人間の受け入れにあたって、もてなさなければならないという義務感を感じている方が一定数いるということが分かった。この義務感から、大学生などの受け入れをためらっている集落もあると聞き、対策が必要であると思った。

人足体験ツアーでは、非日常的な体験をさせていただいた。重い草刈り機を持ちながら、険しい山道を軽快な足取りで登っていく作業は本当に骨が折れるような内容であり、住

民の方が「これを毎年やるんだよ」とお話しされた時には、敵わないと思った。作業中は、昔の集落の様子、鳥獣被害について、米作りについてなど興味深いお話を聞くことができた。

米農家であり集落で生きる人間である住民の方のお話は、たくさんの方に聞いてほしいと思うほど中身が濃い内容であった。また、作業を行っている中で、「大学生みたいなほかの人に手伝ってと頭を下げるようになるとはなあ」という発言から、悲しさだけではなく、住民の方もこの作業を大変なものだと認識しているが、同時にこの作業は自分たちにしかできないという誇りも持っているような気がした。

渡辺さんのお話と夏の人足体験ツアーから、関係人口を増やすことも大事であるが、どう住民に受け入れてもらうかということも非常に同時に大事であることに気づかされた。今後は、住民の方の気持ちにどう寄り添っていくか、どうすれば受け入れにもっと前向きになってもらえるかを調査してみたいと思った。

④郵便局のもつ可能性

今回の聞き取りで、奥川の住民の皆さんは外部の人にも分け隔てなく接し、その後また関係人口が増加しても積極的に関わっていたことが分かった。以下では、関係人口との交流機会を今より増やしていくために、地域との結びつきが強い郵便局に期待できる役割を考えてみる。

郵便局には、関係人口と住民をつなぐ機能を持たせることができる。具体的には、郵便局で外部に向けての情報発信をしたり、大学生などの関係人口によるイベントなどの企画を住民に情報提供し周知したりすることである。外部に情報発信することで、人足体験やその他の伝統的な行事などの参加者を募ったり、奥川の魅力をより多くの人に認知させたりできる可能性があると考えられる。

また、地方の郵便局が首都圏の郵便局や本社ビルで物産展を開催する事例もある。奥川でもこのような取り組みを行うことで、外部へ情報発信することができると考えられる。さらに、郵便局が情報発信をするにあたり、物産展の開催などの物理的な発信の他に、SNSを活用した発信も効果的である。こうすることで外部の人間が奥川を認知し、実際に足を運んで関わりをもつ人が増えるのではないだろうか。

自治体の取り組みとしては、ふるさと納税などの仕組みを活用した情報発信の方法も考えられる。例えば、和歌山県田辺市では、ふるさと納税者への返礼品として「物」ではなく「体験」を提供している（注 11）。その返礼品とは、同市にある世界文化遺産に登録されている紀伊山地の霊場と参詣道の熊野古道を、語り部の解説付きで歩く宿泊付きのウォークプランである。このような取り組みを西会津町も取り入れてみることも、外部に情報発信をするために必要なのではないだろうか。

奥川には、築 120 年以上の蔵と納屋をリノベーションした宿泊施設である古民家ホテルや農家民宿もある。ふるさと納税の返礼品としてこうした施設への宿泊プランを設定し、暮らし体験を提供することで、より多くの人に奥川を知ってもらい、魅力を伝えることができると考えられる。このような取り組みを行うことで、奥川と外部の人間を円滑につなげられると期待できる。

また、今回の聞き取りと以前参加した人足体験ツアーから、もてなすことへの義務感から人足の受け入れをためらっている集落や、高齢化による人手不足により、やむをえず人足の受け入れに踏み切った集落が存在することを知った。そこで、住民の方の負担を考え、現地に赴くことなく支援をすることができる取り組み、実際に感じた住民の方たちの誇り、生き方を周知する取り組みが必要なのではないかと考える。そこで、これらのことを郵便局という機関がどのような取り組みでサポートしていくことができるかを考える。

直接地域を訪れることなく、支援ができる取り組みとしては、「ふるさと小包」があげられると思う。ふるさと小包は、郵便局のネットワークを生かして、全国の「ふるさとの味と香り」を産地から直接届ける取り組みである。人足体験ツアーでは、現地に赴き、田んぼに水を引くための用水路の掃除を行う形で支援をしたが、採れた米をふるさと小包で購入することにより、遠隔地からの支援が可能になる。また、日本郵便株式会社が運営する公式通販サイトが存在するため安心安全な取引ができる。サイトを通して、誰でも商品を見ることができるため、新たな関係人口の創出のきっかけに繋がりうるのではないかと考える。

このように、郵便局が関係人口と住民の仲介役を担いながら情報発信をすることで、両者の関わりがさらに増えることが期待できる。郵便局がこのような機能を発揮することができれば、関係人口の創出につながり、関係人口と住民のつながりを深めることができる可能性がある。

住民の方の誇り、生き方を周知する取り組みとしては、「奥川新聞」、「奥川魅力マップ」を設置することができると思う。人足体験ツアーに参加した際の、作業に対する住民の方の姿勢から、誇りを感じると同時に、自分たちだけではこの作業を賄えなくなってしまったという寂しさも感じた。そこで、住民の方たちがなぜ人足を行っているのか、昔の人足はどのようなものであったか、作業を行っている場所などをさらに調べ、奥川新聞や奥川魅力マップと共に、郵便局の空きスペースを活用し、掲示することで住民の方の誇りや生き方を少しでも多くの人に知ってもらえるのではないか。パンフレットにして、郵便局で配布していただくことも有効なのではないかと思う。人足の様子を知ってもらうことで、住民の方の自信に繋がり、人足の受け入れに踏み切る集落も出てくる可能性があるのではないかと考える。

(斎藤つぐみ・戸倉凜乃)

(2) 地域の歴史的建造物や伝統行事の保存とこれから

①テーマを設定した理由・背景

地域に存在する歴史ある建物や行事は地域住民からすると身近にある当たり前のものだが、他地域の人は珍しいものとして見ることがある。地域の成り立ちを知るうえでその歴史的建造物や行事は貴重な手掛かりであり、観光資源といえるだろう。しかし現在、全国的に

少子高齢化が課題となっており、特に地方に行くほど顕著に見られ、過疎・中山間地域に至っては高齢者しかいない地域も存在する。それにより地域の歴史を引き継ぐことが困難となり、成り立ちを語れる人や引き継ぐ担い手がおらず廃れてしまうという課題を引き起こしている。いま行事が続けられていたとしても、主な関係者が高齢者のため数年後には消滅してしまう可能性も考えられる。

今回、西会津町の奥川地区を訪れると地域の歴史の継承について同様の課題があるように見えた。この奥川地区における歴史的建造物や伝統行事の継承について、訪問をして感じたことと聞き取りを通して知った内容が一致しているのかを確認し、そしてこれからの存続の可能性を広げるためにどんな取り組みが必要なのかについて考えるため、このテーマを設定した。

②調査内容のまとめ

「大聖歓喜天祭礼」、「出戸岩屋祭り」、「奥川七観音ウォーク」の三つの行事について聞き取りを行った。以下の調査内容は、フィールドワークや祭りの当日に配布された資料を参考にした。

i. 大聖歓喜天祭礼

奥川地区の極入集落にある大聖歓喜天は古来より会津三大歓喜天と言われており、中にある像は神仏二天が抱き合う銅製であるという。しかし、その姿を見てしまうと目がつぶれるという話から、文化財調査員以外、集落の人も含めて誰もその姿を見ていない。曰く、象の顔に人の身体をしているという。大聖歓喜天の霊験は「火盗両難」を防ぎ、冤罪を免れ、生路の訴訟を勝たしめるといったご利益があり、また像の抱き合う姿から「良縁」「夫婦和合・子授け」「一切の障害を除き裕福になる」などのご利益もある。加えて大戦中は「戦死を免れる」として、県を跨ぐほど近隣から戦勝祈願の旗を押し立てて参詣する出兵兵士や家族の姿が多くいた。良縁を願う人は、お聖天様で「良縁」「夫婦和合・子授け」を願い、お堂近くにある木の枝を結び、そして同じ境内にある観音堂に奉られてある千手観音・おんば様に安産を願うというコースで参拝することが、いつからかの参拝順序になっている。お堂正面上部に彫られている龍の爪は、その本数で誰が建設に関わったかが分かり、5本は天皇、4本は天皇に近い身分、3本は一般人と言われている。ここでは3本の爪が彫られているため一般の方が建てたとされている。



義平さんに祭りの開催のきっかけを質問したところ、約 10 年前、隣の小屋集落でカタクリの花を鑑賞する会が地区内外の人を呼んで開催されていたことがきっかけで始まった。隣の小さな集落でも出来るなら自分たちも出来ると住民の方から相談を受けて実施することになり、お聖天様の勉強会を地区住民で行ったり、喜多方にいる先生をお呼びして説明をしてもらったりして開催に至った。開催当時はミネラル野菜や手作り人形の販売、甘酢や団子を振舞っていたという。義平さんは初めての祭りの開催だと思っていたが、住民の方曰く戦時中も似たようなことをしていたと言い、お盆の時期になるとやぐらを立てて音頭を取っていたという。今年（2023

年）は、コロナ禍による中止期間を経て 4 年ぶりに再開したが、住民の方の高齢化もあって昔出来ていたことが今はできなくなっていると話されていた。

ii. 出戸岩屋祭り

奥川の出戸集落には「聖沢」という名前の沢があり、聖の修行地であったという。この集落にある出戸岩屋虚空蔵尊は約 500 年前に造立され、出戸岩屋祭りは現在まで続いている。お堂内には三体の像があり、中尊は木造虚空蔵菩薩坐像、脇侍が木造不動明王像と木造毘沙門天立像である。特に中尊の虚空蔵菩薩は町指定の文化財となっており、伊勢朝熊の写しと言われている。伊勢朝熊とは三重県伊勢市朝熊のことであり、この地域にある金剛証寺・内宮の奥の宮にある本尊が虚空蔵菩薩である。「お伊勢参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参り」と伊勢音頭に唄われているほど有名で、日本三大虚空蔵菩薩の第 1 位に位置付けられている。観音菩薩・不動明王・毘沙門天という三尊形式は他に例が見られるが、この出戸の虚空蔵菩薩・不動明王・毘沙門天という三尊形式は他に例がないという。

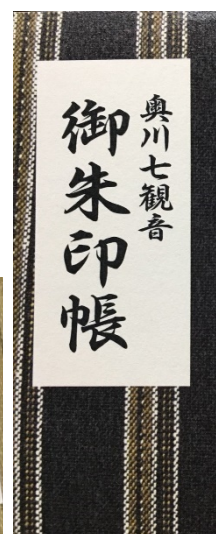
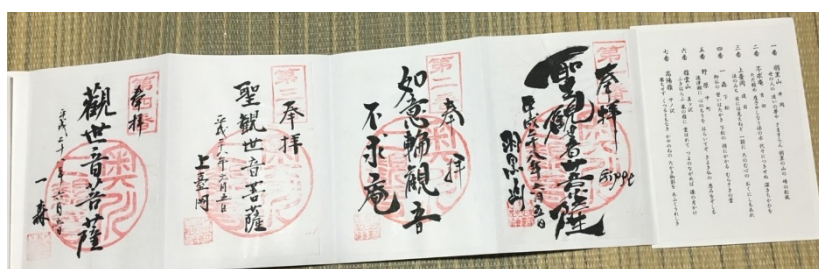


菩薩様の前に置かれている岩は願い事に関する岩で、願い事を思いながら持ち上げる際に重いと思い持ち上げて重かったら、また軽いと思い持ち上げて軽かったら願いが叶うという。そして、虚空蔵菩薩への願いは 99%叶うと言われており、それらの霊験から新潟県

から参拝しに来ていた人もいたという。実際に出戸岩屋虚空蔵尊に行くとなると、車を降りて山の中を 30 分程歩く。最後は目の前に 45 度に近い階段があるが、危険なため普段は迂回路を通ってたどり着く。

iii. 奥川七観音ウォーク

義平さんに奥川七観音の誕生を質問したところ、明治時代に七観音が注目されたことから、奥川でも各集落に存在していた観音像の中から七つ取り上げて奥川七観音は誕生したと言う。各観音像には「世の人の迷いの夢やさますらん羽黒の山の峰の松風」といった御詠歌が設けられている。奥川七観音ウォークは、高齢者もいる中で約 12 km という距離を歩いて観音を巡りつつ地域を見てもらうために始めたという。始めた当時は御朱印ブームもあったため、地域おこし協力隊の方に朱の判子の作成をお願いしてオリジナルの御朱印帳を作成して好評を得ていた。



③調査をしてみて考えたこと・感想

義平さんや住民の方に各伝統行事の歴史や苦労していること、将来のことなどの質問を行った。その聞き取りをして印象的だったお話を二つ取り上げる。

i. 歴史的建造物や伝統行事がもたらす価値について

ひとつは歴史的建造物や伝統行事がもたらす価値についてである。大聖歓喜天祭礼のお話を聞いた際、数年前に始めた祭りが実は 50 年以上前にも行われていたことを住民の方が覚えていたという話や、当時子どもだった頃はやぐらを建てて音頭を取っていたというエピソード、戦時中は鐘が鳴り止まなかったという話など、祭りが確かに存在して受け継がれてきた事実がある。またお堂にあるお聖天様を見てしまうと失明してしまうという言い伝えが語り継がれており、文化財調査員以外は集落の人も含めて誰もその姿を見ていないとのことだ。このようなお話を聞くと、単に古い建物や像があって祭りが行われているから歴史ではなく、祭りの成り立ちや言い伝え、実際の体験談などを地域住民自身の言葉や記録資料を通して伝えられること、そして見聞きした私たちが当時の人々の姿を想像することが出来て初めて歴史的価値が生まれると考える。その価値が奥川地区の伝統行事や関係する歴史的建造物にはある。

また、歴史的建造物や伝統行事を保存することは歴史的価値のみに収まらないとも感じた。大聖歓喜天のお堂に施されている繊細な彫刻に昔は朱色で染められていたという話や、彫られた龍の爪の数によってどんな身分の人が建設に関わったのかという話を聞いた。極入集落祭りで展示されていた測量器具や歴史書は、昔会津に島流しにされた安藤有益さんが研究などで使用した物であり、町の重要文化財として天文の分野に携わる人が見に来たりすることを知った。このように



地域の祭りや展示物は歴史から派生した美術的価値や学術的価値などの多様な価値を生み出している。一つの分野に囚われずに広く対象を迎え入れることが出来る祭りの仕組みづくりが奥川にもあると思った。

さらには行事が人々の交流の場になることを再認識した。義平さんに祭りの工夫している点を聞くと、住民の方は何もせずに座っているだけで良いように呼び込んでいると話されていた。高齢者の外出や誰かと交流することが減ってきている中で、人が集まる場が用意されていることそれ自体が大切だと思う。何もしないで目の前で誰かが何かをしている姿を見たり、話したくなったら話せる環境があつたりと、日常とは違う刺激を受ける場となり、交流の場を生み出すきっかけになると認識した。毎日を過ごす当たり前とは違う体験が提供され、そして享受する場こそが祭りの存在意義だと思った。



ii. 伝統行事の維持、継承について

もうひとつが伝統行事の維持、継承についてである。歴史的建造物や伝統行事が歴史単体としてではなく複数の価値をもたらし、また地域における交流を生み出している。しかし、課題として今後どのようにしてこの遺産を守り続けていくかというお話が印象的だった。

大聖歓喜天祭礼や出戸岩屋祭り、七観音ウォークなど、どれもコロナ禍や大雨災害などの影響で休止期間があった。再開するとしても地域住民が年を取ってしまい、従来していたことが困難となり重い腰が上がらなくなっていると話されていた。また子どもが少なく若者は勤めに出ていることで管理も大変になり、引き継ぎも困難になっているのが現状だという。少子高齢化の課題は奥川でも深刻な状況となっていた。そこで義平さんがお話しされていたのは、住民と関係人口との関わりである。七観音ウォークで配られるオリジナル御朱印帳の朱の判子は当時の協力隊が作成したといい、義平さん自身も祭りの説明などで参加をしているという。「協力隊の方がnoteや瓦版を使って発信してくれると地域が発掘されている感じ

がして嬉しい」と義平さんは語っていた。

一方で、奥川の住民たちが築いている一体感も大切だと語っており、義平さんが指示を出さなくとも自分たちでお堂の掃除をしたり、祭りで使う道具や出し物を用意したりしているという。あくまでも住民主体であるという意識のもと、出来ることは自分たちでして、出来ないことは協力隊員などを巻き込みながら実施することが、祭りを維持していくうえで大切なことだと思った。また、災害などにより急遽開催できなくなる場合や祭りそのものの実施が困難になったとしても、祭礼の日にはお堂を開催して誰もが見に来れる状態にしていくことも大切だと語っていた。

この地域にはこういう建物があり、祭りがあったという事実から確かにこの地域に歴史があったと語れることは、自身が感じる地域の当たり前の物事が特別な存在であることに気付くだけでなく、それが自慢できるものであると認識することが出来る。しかし、外に目を向ける機会や外部から人が来る機会が減れば、それだけ身の回りの特別に気づく機会も減ってしまう。

そこで私たち大学生や地域おこし協力隊のような関係人口の存在が新たな気づきを提供してくれると感じた。日々新しい人が地域に訪れるため、その人ごとに地域の良いものを見つけていくからである。その点について奥川は多様な人を受け入れて地域住民との交流を行っている。これから多くの当たり前であり特別な存在に気付くことがあるだろう。今後も奥川では、自分の地域が何もないと感ずることなくオリジナルをたくさん持っていると気付ける機会を継続していき、それを関係人口との協力で周囲に広め、地域に歴史が確かにありと誇りを持てる体制を整えていくことが必要だと考える。

④郵便局のもつ可能性

以上のように奥川には歴史やそれと共に暮らしてきた人々の姿があり、一方で継承が困難になっているという課題もある。この点を踏まえて奥川郵便局でいくつか出来ることがあると考える。

ひとつは地域のイベントカレンダーを局内に掲載することである。集落単位で行われている祭りから奥川全体の行事まで全てのイベントをひとつにまとめ、カレンダーとして可視化しておくことで地域内外の利用者に開催日を伝えることが出来るだけでなく、住民の方もこの集落で祭りがあるのだと認知することが出来る。事前にこの日に行事が行われると知ることによって日程調整することも可能であり、何よりも1年間の楽しみを作ることができると考えたからである。

また地域資料を展示し、奥川魅力マップを掲載・配布することも出来ると思う。特に過去の岩崎ゼミの先輩方が作成した奥川魅力マップは、地域のどこにどのような歴史史料があるのか掲載されていてわかりやすく、一度で奥川の歴史の在り処を知ることが可能なため、マップを手にとって地域を探索することが出来れば良いと思った。以前、義平さんが「地域

全体で博物館に出来ないか」と話されていたため、郵便局もその一つのパビリオンにすることで、郵便局に昔の物が展示されているというギャップを埋めることにもなると思う。さらに、各行事への参加が厳しい人に向けてその行事の由来や霊験などをまとめた資料を手に取りれる状態にしておくことで、確かにこの地域に來たという記憶になり、時にはまた來て実際に見てみたいという気持ちを抱くのではないだろうか。

郵便局は奥川に歴史があったという事実を伝える場としての可能性がある。覚え続ける人がいる限り歴史は継承されていくため、観光案内所のような拠点の一つとして郵便局の空きスペースを利用していく可能性があると考える。

(志賀翔太)

(3) 奥川地区の危険箇所の解消と災害対応

①テーマを設定した理由・背景

本テーマを設定した理由と背景は主に二つある。一つ目は現在の奥川地区に危険な場所が見られたことである。奥川地区は高齢化率が非常に高く人口の減少も著しく、空き家や欠損した道路などが多々見られる。そのため、この現状について聞き取り調査を行うことで住民のリアルな不安や危険視している場所が浮き彫りになると考えた。二つ目は今年（2024年）の元日に起きた能登半島地震である。今回の地震では被災集落が孤立したことにより避難所での生活が困難なものになっている。そのような災害時の不安を少しでも減らせるよう本テーマを設定した。

②調査内容のまとめ

i. 住民の方のお話を聞いて

2023年8月18日に行われた極入集落の大聖歓喜天祭礼で、極入集落に住む方にお話を伺うことができた。その中で、生活の中で危険を感じることや不安に思うことはあるか尋ねたところ、2022年に発生した豪雨災害を挙げられた。8月に生じた豪雨は道路の決壊や住宅への浸水、田畑の冠水や集落の孤立を引き起こした。住民の家もたくさん流されたという。そんな中、いまだに河川の整備が進んでいないところや道路が危険な箇所も多く、日常生活においても様々な不安を感じているそうだった。確かに奥川にフィールドワークとして赴いた際に、工具を積んだトラックなどを多く見かけたが、1年以上経過した現在でも修復や整備があまり進んでいなかったことが伺える。この背景には、行政に整備を頼んではいるものの、工事を完成させるための金銭的な問題が関係しているようだ。そのため、用水路などほかにも整備が必要な場所もあるが現状我慢せざるを得ないとの声もあった。また、今回の災害で大きな爪痕を残した土砂災害についても、大きな恐怖を覚えると話されていた。

続いて、ハザードマップについての質問をしたところ、ハザードマップ自体は最近配布されたものを所持しているが、ほとんど見ないと話されていた。ハザードマップを持ってい

も日ごろから確認しておく必要があると感じた。さらに、災害時には避難所が設定されているが、避難所自体に特に意味はなく、避難する際には住民それぞれで避難しているという。避難所は避難所としての機能を持つ所に設定するべきだと思う。

ii. 奥川支所長のお話を聞いて

防災に関する情報は、防災行政無線を通じて住民に届けられている。しかし、防災に関して支所としての取り組みは特になく、避難所などの提供を行っている程度であるようだ。

支所長も災害としては土砂災害が最も危険だと話す。特に弥生集落は山に近く、一昨年の豪雨災害でも土砂による多くの被害が見られた。中山間地域における土砂災害が喫緊の課題であることは明白である。しかし、どこが危険かは長年住んできた住民が一番よくわかっているとのことであり、各々に任せている側面もある。住民によって構成されている民生委員や消防団も、非常に重要な存在であるが、高齢者が多くなっているため、その維持も難しくなっている。また、建物の老朽化も深刻な問題となっていると話していた。古くなり倒壊の恐れがある建物もあるが、行政として公共物以外に手を付けることができないため、個人の判断に任せざるを得ないようだ。もし、空き家の持ち主の許可や承諾が得られたら、避難所や集会所、「結」のようなボランティアの宿泊施設として活用するのがよいのではないかと考えた。

③調査をしてみて考えたこと・感想

近年起きた災害もあってか、災害時の不安要素が明らかになったように思えた。特に行政側としての被災・避難の想定と、実際に住む住民の意識の間には大きな違いが存在しているようにも思える。これからますます高齢化が進むと考えられる奥川では、新たな防災対策や、生活する上での危険の認知や防止を行う必要があるだろう。平素の交流を通して住民と局員が顔なじみになっている郵便局と、学生等の外部人材を大いに活用することで、奥川での暮らしがより良いものになるのではないかと考えた。

④郵便局のもつ可能性

先述した聞き取り調査から見えた課題に対して、奥川郵便局およびその空きスペースを活用する方法を考察する。まず考えられるものとして、住民との顔の見える関係を生かした被災者支援の取り組みである。過去の災害においても、災害時に一時避難所になった体育館で暮らす高齢被災者宛の支援物資や手紙などを本人に直接渡せるのは、互いに顔見知りの郵政外務職員であることが指摘されている（注 12）。配達時のコミュニケーションにより相互に励まし合う力は、郵便局だからこそ発揮できる。

続いて、災害時の備蓄保存の支援である。2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震をその根拠にする。能登半島地震では地震や津波による被害もさることながら、避難所での生活の厳しさが注目されている。特に、食料や水分が十分に行き渡っていないことが問題となっ

ている。その原因としては、地震によって道路が決壊したことで救援物資が届かないことが大きい。そのため、備蓄していた非常食等では十分ではなく、苦しい状況が続いている。

奥川地区でも、実際 2022 年の豪雨で集落が孤立した例があり、その規模によっては同じような状況に置かれるかもしれない。その対策として、今以上の非常食、水の備蓄を郵便局に保存しておくことがよいと考える。郵便局に置くことで避難所あるいは避難所まで行くことができない人の自宅にもより効率的に物資を届けることができるのではないか。他にも、医療品などの備蓄があればよりよいと考えられる。

また、学生も協力して防災マップを制作して、郵便局に掲示するのも非常に効果的だと思う。学生と住民が地区を見て回り、危険だと思われる場所を地図に書き起こし、住民への聞き取り調査を実施し、その結果を書き起こした地図に当てはめ、より身近なハザードマップのようなものも作成できると考えた。住民がよく訪れる郵便局は、防災の面においても非常に重要な役割を持つと期待できる。

(西瀬壮太)

第3節 「価値創造活動」(地域づくり・地域活性化)に向けて

(1) 農産物のブランド化～ミネラル野菜の担い手育成

①テーマを設定した理由、背景

町では、複合経営による農家の所得向上を目指し、1997 年より「ミネラル野菜」の振興に取り組み、土壌診断料の補助、ミネラル農産物の直売活動の支援、レンタルハウスによる冬作支援等を行っている。2000 年 8 月には家庭菜園に取り組む女性 19 名が集まり、「にしあいづ健康ミネラル野菜普及会」が設立された。同月に、町の商業団地内で開催した「健康ミネラル野菜市」には、多くの町民が来場して好評を博した。普及会では、会員の健康増進や所得向上に加え、ミネラル野菜を町のブランドにしたいと考え、各種イベントに積極的に参加して PR と販売に取り組んでいる。2014 年度には会員が 63 名となっており、「豊かなむらづくり顕彰」(農林水産省)を受賞している。私が初めて西会津町奥川地区に訪れた時も、道の駅で実際にミネラル野菜を見ることができた。ミネラル野菜とはどんなものなのか、もっと詳しく知りたいと興味をひかれたので、このテーマを設定するに至った。

②調査内容のまとめ

今回お話を伺った L さんは 1989 年からトマト栽培を始めた。栽培開始から 10 年が経ち、連作障害など様々なことが重なり毎年採れる量が減少し始めた時、西会津町にやってきた農学博士の中嶋常允先生の講演をきっかけにミネラル栽培に取り組んだ。戦前の日本の土壌

はミネラル成分が豊富であったが、戦後化学肥料により作物を作るようになった。化学肥料は作物のためによいもので、採れる量も増加する半面、土壌の中のミネラル成分を奪うものであり、当時の西会津町の土壌もミネラル成分を失っていた。Lさんをはじめとした農家の方々が講演前に集められ、そのようなお話をされたそう。ミネラル栽培に取り組んで以降、1998年は会津地方で大雨が降り、喜多方市ではほとんどハウスの中のトマトが枯れてしまったが、Lさんのトマトは10本ほどしか枯れなかった。これはミネラル資材を入れたためではないかとLさんは考えている。



Lさんは20年以上ミネラル野菜の栽培を続けてきたが、一昨年(2021年)、昨年(2022年)は上手くいっていないのが現状である。2021年8月3日、西会津町では大雨が降り、水路が壊れてしまったため、冠水も追肥も何もできなかった。去年は猛暑により、実が小さいうちから色が入ってしまった。そのため、例年だと10月から11月頭まで生産していたのだが、2022年は9月いっぱいまで持つか持たないかという状況であった。元々トマトは寒いところで生まれたもので、冷夏が適していることもあり、猛暑の影響は非常に大きい。

また、西会津町でミネラル栽培を行っている人は3年に1回土壌分析を行わなければならない。検査結果によりミネラル資材を入れる量が変わってくる。最初の3年間は町で負担してくれるが、3年を過ぎると費用は自己負担になる。Lさんはこの土壌分析に加えて、3年に1回熊本にトマトを送り生態分析も行っている。

Lさんは現在家の前で直売を行っている。Lさんのトマトを求めて新潟県などからやってくる人も多い。午前5時頃販売開始し、6時頃には半分以上なくなり、午前中には完売してしまう。土日場合はどんどん足してもすぐ売り切れてしまう。Lさんは以前、道の駅「よりっせ」、スーパーの「リオンドール」で販売するほか、神奈川県川崎市の「ヤオマサ」というスーパーに週3回程度農協経由でトマトを送っており、川崎市内にもかなりのリピーターがいた。通常のトマトは水に入れると浮くところ、Lさんのトマトは沈む。それほどしっかり果実が詰まっているということであり、一度Lさんのトマトを食べた人は2回3回とリピーターになる人が多いと嬉しそうに話していた。現在はヤオマサやスーパーでの販売は行っていないため、Lさんのトマトを食べたい人は奥川に来る必要がある。

ミネラル野菜の課題として、Lさんは「後継者がいない」ことを挙げた。現在ミネラル野菜の栽培をしている人は高齢者が多く、今後ミネラル野菜を継続していくためには後継者が必要であり、このままではミネラル野菜が終わってしまうという懸念が挙げられている。ミネラル野菜普及会も現在は高齢者が多く、近年辞める人は続出している。あとから続いて若い人が増えると思われていたが、増えることはなく、普及会の存続も厳しくなっている。

Lさん自身も7棟あるハウスを妻と二人で作業しており、管理も大変だと話していた。今まで経験がない人でももし「やりたい」という人がいれば、Lさんは親身になって教えたいとのことだ。

もう一つの課題としては、資材関係の価格が高いことである。10 kgほどの資材で6000～7000円かかり、それを何度も入れるため、費用がかかる。西会津全町民に普及できないことの要因としては資材が高いことが大きく、「もう少し安いと使う人が多くなると思う」と話していた。資材が高いことに伴って、作物も高く売れるということではなく、農協出荷で同じ市場に行けば単価は同じであることも課題となっている。

③調査をしてみて考えたこと、感想

ミネラル野菜が西会津町民だけでなく、県外の方々にも広く愛されていることが分かった。トマトを求めて他県から朝早く来てくれる人がいるというのはなかなかないことであり、非常に誇れることである。そのため、このミネラル野菜を絶対に終わらせてはいけなと強く思った。しかし、同時に継続していくには課題が山積みであることも分かった。資材関係のような金銭面をどうにかすることは難しくても、後継者問題は対策を講じていけば少しずつ解決に繋がっていくのではないかと考えた。また、現在は隣県である新潟県から来てくださるお客さんがいるが、より多くの県外の人々にミネラル野菜を知ってもらうためにも販売経路の拡大が必要となってくると考えた。

④郵便局のもつ可能性

ミネラル野菜は西会津町を代表するブランド農産物となっているが、一方で多くの課題もある。ミネラル野菜を存続していくために郵便局でできることを三つ考えた。

一つ目は担い手を募集するための告知活動である。ミネラル野菜を紹介したり興味のある人を募集したりする内容のパンフレットやポスターを私たち大学生が作成して郵便局に設置してみるとよいのではないかと考えた。郵便局は多くの人が利用するため、利用した人により宣伝になる上に、置いてあるだけで多くの人が目にすると考えられる。大きなポスターの場合は簡単に目に入りやすく、パンフレットの場合は郵便局を利用した人だけでなく、持ち帰って家族の方々にも見てもらえるだろう。

二つ目は担い手の講演会や相談会等の支援である。Lさんが中嶋先生の講演をきっかけにミネラル野菜の栽培を開始したように、栽培をやりたい人を見つけるためには必要な活動である。後継者問題が大きな課題となっており、ミネラル野菜を広めるために結成された普及会も年々人数が減少している今、実際に栽培をしている方々の生の声は一番の後押しになるだろう。

三つ目は販売支援である。郵便局の空きスペースを活用してミネラル野菜の販売をすることで、Lさん宅や道の駅に行けない人がミネラル野菜を買ってみるよい機会になるのではないだろうか。より多くの人がミネラル野菜を手にとれるように、様々な方法で販売

をしてみることはミネラル野菜の可能性を大きく広げると考える。

(寺島遥香)

(2) 観光人口の確保・拡大に向けて

①テーマを設定した理由・背景

私は、奥川地区で起きている様々な課題解決のためには、町民だけでなく、外部からの人の力が必要であると感じた。そして、奥川地区に何度か訪れる中で、歴史あるお祭りや新たな施設ができていることを知った。そのような場所に観光客が訪れることで奥川地区全体が盛り上がることはできるのではないかと考えた。そこで、観光人口を増やすために何ができるかを考察する。

②調査内容のまとめ

まず、地域おこし協力隊として活動している渡辺貴洋さんに、なぜ奥川地区を選んだのか尋ねた。渡辺さんが奥川地区を知ったきっかけは、大学時代に「農都交流」という、いろいろな企業や学生を交えたモニターツアーを町でやっていてそれに参加したことだそうだ。そのモニターツアーを開催したところが西会津町の中でも奥川地区であり、義平さんなど住民の方と出会いお話をしていく中で、奥川地区に魅力を感じて、地域おこし協力隊になる際に奥川地区を選んだそうだ。

次に、奥川地区を訪れる人はどのような目的で訪れるのか尋ねた。奥川地区を訪れる人は観光目的というより、新潟県や福島県浜通りの人たちがバイクのツーリングで訪れることが多い。また、私たちと同じように地域活動を行う大学生や、農村体験といって稲刈りや田植えなどに参加する学生などが来るそうだ。

他に郵便局調査の際に県外から来た方の中には、登山が趣味でその際に奥川地区に来たという方もいた。

③調査をしてみて考えたこと・感想

渡辺さんのお話からは、奥川地区に住んでいる方々や自然の豊かさを魅力に思い、奥川地区を訪れる人はいると分かった。そして、私たちを含め、大学生や体験に来た人たちを奥川地区は、多く受け入れてくれているので、このような若い人たちがもっと奥川地区を盛り上げていけば良いと感じた。また、バイクのツーリングで訪れる方々が道路を走るだけでなく、もっと奥川地区の魅力を知ってもらいたいと感じた。

観光客を増やすためにはまず情報発信が最も重要だと感じた。観光客を増やすためには、奥川地区に何があるか、どんな魅力があるかを発信していく必要がある。そして、それらの

情報をより多くの人の目に留まるようにしたい。

私はゼミの活動で最初に奥川地区に来た時には、観光場所やイベントなど何も分からなかった。何度か訪れる中で、義平さんや渡辺さんに連れて行ってもらい、西会津国際芸術村や古川利意記念美術館を知った。地区には小さな商店やシャッターアートなど気軽に行くことができる場所もあった。

そして、岩屋出戸祭りや大聖歓喜天祭礼といったイベントの情報も一緒に発信したい。人足体験や農村体験は、普段は体験できることではないため興味がある人も多いと思う。また、



出戸岩屋祭りや大聖歓喜天祭礼は、歴史があるもので歴史の好きな人に知ってもらいたい。そのような行事に奥川地区の住民ではなくても参加できるという情報を広めていきたい。古川利意記念美術館、シャッターアートといった近年の取り組みについても、広く情報を発信したい。



その際に Instagram や X (旧 Twitter) など様々な媒体を使い、多くの人の目に止まるようにできたら良い。そして、これらの情報を一度に入手できるようなマップを作成したい。

④郵便局のもつ可能性

大学の活動や学校で行う農村体験で奥川地区を訪れる人が多いとあったが、それにより奥川地区を初めて知る人も多いと思う。また、奥川地区には、ツーリングで訪れる人や登山に行く途中で来たことがあるという人にも出会ったことがある。観光目的で来ていない人たちが気軽に観光情報を入手することができれば、町を通るだけでなく、観光地にも足を運んでくれると考える。

気軽に情報を入手するためには、郵便局に協力してもらうことが良いと考えた。例えば、福岡県太宰府市や岩手県遠野市など多くの地域で郵便局が一体となっていて行われている取り組みに、市内の郵便ポストに QR コードを設置するというものがある（第 1 章第 4 節を参照）。その QR コードを読み取るとその市内の観光情報や防災情報などを得ることができるものである。この取り組みは奥川地区でもできるだろう。

上記に挙げたような奥川地区の景観やイベントの情報のほか、西会津町の観光情報も載せて、西会津町内で QR コードを設置できると良い。そうすれば、奥川地区以外の西会津町に訪れた人の目に留まる機会が増えて、より多くの人に広まる。ポストだけだと少ない場合は

お店や貼れそうな場所があれば、協力をしてもらい QR コードを設置できれば良いと思う。

もちろん、QR コードを読み取る方法が分からない方もいると思うので少数でいいが紙でも設置したい。郵便局に風景印を貰いに訪れる人にも配ることができたらどんどん広まっていくと思う。

(桑机萌々香)

(3) 地域内外への情報発信のあり方

①テーマ設定の理由

近年、過疎地域であった場所が独自の強みを生かして地域活性化に成功している事例が見られる。それらの成功の裏側には、地域の魅力を発信するための情報提供や、SNS を用いた広報活動などが存在している。今回の調査地である西会津町奥川という地域でも、情報発信を通じて地域の活性化につなげることができないかを調査したいためにこのテーマを設定した。また、人口が少なく高齢化率が高い奥川では、どのような方法で情報を住民に向けて発信しているのかについても調査をすることで、今後の中山間地域における情報発信の具体例になると思い聞き取りを行った。

②調査内容のまとめ

i. 奥川支所長への聞き取り（現在行っている情報発信について）

地区内への情報発信では主に紙媒体の物を用いており、隔週ごとに自治区長あてに送り、それが各世帯へと配られていくそうだ。これは、高齢者が多いため、高齢者が情報を受け取りやすいようにする必要があるためである。また、災害などの緊急時には防災無線を通して情報を伝えたり、民生委員や地元の消防団が声掛けをしたりしている。

次に、地区外への情報発信はどのように行っているかについてお聞きした。地区外（移住者や関係人口）に対する情報発信は紙媒体ではなく、町のHPやSNSを用いている。主にSNSはnote、Facebook、Instagram、LINEを活用している。

2022年度に設立された「奥川地域づくり協議会」では、これらのSNSを用いて奥川の魅力を発信したり、奥川で行われている活動の説明と参加を促すような発信をしたりしている。

移住を考えている人に対しては、町役場の商工観光課が中心となり、空き家を探したり、サポート体制の整備を行ったりしている。また、2022年に新たに発足した「西会津のある暮らし相談室」でも、移住や二地域居住などを考える人へのサポートを行っている。

「奥川地域づくり協議会」は、地域の自慢と誇りを再確認し、地域課題解決のために考え、実践し、地域住民の福祉増進、産業振興、生活文化振興等に寄与することで、協同の地域づくりを推進することを目的に設立された組織である。奥川自治区内外の正会員やサポート会員らで構成されており、継続的な支援をすることができる会員制度が用意されている。

SNS では、大学生との交流の様子や人足の様子、奥川の魅力について写真や実際のコメントを用いて発信している。これを見れば奥川がどんな地域で、何が行われているのかを一目で理解することができるものとなっている（注 13）。

また、「西会津のある暮らし相談室」は、「移住・定住の促進」「空き家の利活用」「地域おこし協力隊」の 3 分野を主な業務とし、西会津町への移住を希望する人や、町内での空き家の売買や改修をしたい人向けの相談室である。住まい等に関する補助金の情報や移住相談や地域の案内を行うサポーターが数名存在している。ただ住む環境を提供するだけでなく、地域の人との出会いや暮らしのサポートまで行うのが特徴である（注 14）。

③調査をしてみて考えたこと・感想

今回聞き取りをして思ったことは、地域ごとに情報発信の仕方やデジタル化の程度は変えていくべきだということである。すべてをデジタル化するのではなく、アナログにもいいところはあるため、地域住民のニーズに合わせて当てはめていくべきである。また、地区外への情報発信では、地域の魅力だけでなく、サポート体制がしっかりしていることをアピールしていくことが大切であり、それにより移住を考えている人も安心できると思う。

④郵便局のもつ可能性

郵便局の空きスペースに、移住情報や、奥川で行われている活動に関する情報を収集できるブースを常設することができるだろう。地域内の空き家がどこにあるのかをマップにして作成したり、交通アクセスに関する情報も掲示したりすることで、行き来しやすい状況を作ることでもできると思った。移住に関しても事前に郵便局に連絡しておくことで、相談できる人材を派遣し、臨時の相談所のような場を提供することもできるのではないだろうか。

先行事例としては、第 1 章第 4 節でも取り上げた、石川県と日本郵便（株）北陸支社が連携協定を結んで行っているものが挙げられる。これは、石川県の郵便局長を移住サポーターとして委嘱して、移住・定住される方の生活全般の相談等のサポートをしているものである。

奥川郵便局でも、局員が移住サポーターとして相談を受けることや先ほど述べたようなブースを設置することは、比較的取り組みやすいものではないだろうか。

（阿部一輝）

第4節 むすびにかえてーボトムアップ型地域づくり拠点としての郵便局への期待ー

本研究では、福島県西会津町奥川地区でのフィールドワークをもとに、人口減少と高齢化が進む過疎地域の課題解決と持続可能性を高めるために郵便局が果たしうる役割と可能性について検討を行った。

第1章では、調査の目的と背景、手法を整理した後、郵便局による地方創生の取り組みについて先行事例を整理した。全国の郵便局の中には、地域密着性という特性を生かし、郵便サービスの利用という用途を越えた様々な生活支援サービスや地域活性化に取り組む事例がみられることを把握した。

第2章では、奥川郵便局の来店者および局員を対象とした聞き取り調査結果をまとめた。2021年度調査と同様に、多くの来店者は、郵便局を「なくなっては困る」、「親しく話ができる」場所ととらえており、住民の方にとってなくてはならない生活のインフラとコミュニケーションの場となっていることが明らかになった。また、局員の方からも、「高齢者が多く、郵便局を頼っている人が多い」、「何かあった時の駆け込み場所」という認識が挙げられた。

第3章では、地域コミュニティの拠点として郵便局の可能性を探るために、郵便局の空きスペースをお借りしてコミュニティ・カフェの実証実験を行った。住民の孫世代である学生たちが企画したことで、「孫カフェ」と名付けられたコミュニティ・カフェでは、「奥川魅力マップ」や「想い出のポスト」の作成、大学生が作成した「奥川新聞」の配布、「おくが輪写真展」、「むらの保健室」を行い、参加者との交流を深めた。「孫カフェ」には地域住民の方に加え、奥川地区に移住して宿泊施設を運営する方や、奥川地区郵便局の元局員の方、看護学校の研修で西会津町に来ている学生の方、現在は東京に住んでいるが時折里帰りして西会津町に帰ってくる方など、多様な方々が訪れてくださった。カフェでの交流を通し、奥川郵便局は地域のコミュニケーションの場として機能しており、行政や地区との連携により郵便局が地域づくりにより一層関与することで地域の持続性を高めていく可能性を改めて認識することができた。

第4章では、本報告書のまとめとして、西会津町奥川地区が直面している課題とその解決に向けて郵便局が果たしうる役割・可能性について検討した。まず、地域が直面する課題解決に向けたテーマとして大きく3つの分野に分類した。1点目は、「生活支援活動」（人口減少の進行による生活面での課題解決に向けた取り組み）、2点目は、「コミュニティ支援活動」（集落の共同作業や行事などの支援）、3点目は、「地域価値創造活動」（地域資源を生かした活性化、人材育成）である。その上で、具体的な地域課題として、①住民の交通手段の確保、②高齢者の健康づくり、③地域住民の生きがいづくり、④関係人口による集落支援、⑤歴史的建造物・伝統行事の継承、⑥災害・防災対応、⑦農産物のブランド化、⑧観光振興、⑨情報発信の9項目を学生が自ら選んで設定し、役場や関係者から聞き取りを行った結果をまとめ、今後期待される郵便局の役割と可能性について検討した。

今回のフィールドワークを通してまずわかったことは、奥川地区は、確かに高齢化率が高く、様々な地域課題に直面しているが、私たちが出会った住民の方々は、地域の魅力や守っていききたいものに強い誇りを持っており、自治意識がきわめて高く、地域活動に意欲的な方々が数多くいらっしゃるということである。こうした住民の方々が取り組む奥川地区の地域づくりの動きに、若者を中心とする外部人材や関係人口が引き寄せられ、彼らがまたその地域づくりに関わることで地域がより魅力的なものに磨かれ、さらに外部から関係人口を呼び込むという循環が生まれる可能性がある。こうした循環を生み出す取り組みに、郵便局は力を発揮できると考えられる。

住民との距離が近く顔の見える信頼関係が構築されている郵便局は、とりわけ人口減少の著しい農山村地域においては、単なる郵便や金融・保険の窓口ではなく、人的つながりと信頼関係をバックボーンとした「なくてはならない」場所となっている。他方で、郵便局は、広域的な全国ネットワーク機能も有する。この二つの特性を生かして、行政や集落、外部人材、移住者等との協力・協働、地域の取り組みに関する幅広い発信を通し、地域づくりに深くコミットしていくことが可能なのではないだろうか。

例えば、今日の農山村地域では、高齢化やコミュニティの持続性に向けた課題解決に向けて、各集落を包含した広域の地域運営組織が設立され、様々な地域課題への対応を図っている（注15）。奥川地区でも「奥川地域づくり協議会」が立ち上がり、今後の地域運営の方向性について議論が重ねられ、関係人口を巻き込んだ地域づくりの動きを進めている。また、行政においても、住民の視点に立ったDXの取り組みや移住者受入の窓口の設置が行われ、高齢者の生活支援や移住者の起業支援が行われている。こうした新たな挑戦が生まれている中、地域に根ざす公共的機関である郵便局もまた、地域の一員としてボトムアップの地域づくりに参画していくことができるように考える。例えば、本報告書でも提案したように、年金を受け取りに来る高齢者と学生とで手作りのカフェやサロンを催したり、地区の行事や住民の活動を紹介する展示を行ったり、地域おこし協力隊や移住者の活動に関して情報発信を行ったりすることは、奥川地区および地区を支援する数多くの人々の存在を広く伝えることにつながり、地域の活力と住民の生きがいをも新たに生むのではないだろうか。

重要なのは、こうした郵便局の取り組みをバックアップする支援体制の構築である。郵便局は、地域のセーフティネットとしての役割が期待されているが、市場競争と合理化の論理が貫徹される中で地域貢献活動をいくら謳っても、現場に負担がしわ寄せされるばかりである。とくに過疎地域の社会インフラとしての郵便局の役割発揮に関して、そのコストをどのように負担していくべきなのか広く議論していくことが必要だろう。郵便局が明治時代以来地域で築いてきたレガシーを引き継ぎ、過疎地域が直面する困難をともに解決する社会的企業として力を発揮することが求められていると考える。

そのためには、過疎地域の郵便局が地域で実際に果たしている役割を可視化し、地域コミュニティの再構築に関わることの効果を積極的に発信していく必要がある。高齢化と人口減少が進む今日においては、地域とのつながりを強めていくボトムアップ型の取り組みの

プロセスにこそ地域と郵便局の未来がひらかれていくのではないだろうか。

<引用・参考文献>

注 1 「郵便局のみまもりサービス」(日本郵政ホームページ)

<https://www.post.japanpost.jp/life/mimamori/> (最終閲覧日 2024 年 2 月 6 日)

注 2 西日本新聞「太宰府のポストに QR コード 日本郵便と市 避難先や観光情報発信」
(2019 年 12 月 12 日) https://www.nishinippon.co.jp/item/n/567446/#google_vignette
(最終閲覧日 2024 年 2 月 6 日)

注 3 四国新聞「防災や観光情報、手軽に ポストに QR コード掲示 坂出市と日本郵便が
連携」(2023 年 9 月 7 日) <https://www.coolkagawa.jp/news/entry-3206.html>
(最終閲覧日 2024 年 2 月 6 日)

注 4 「郵便局長移住サポーターによるおすすめ地域情報 - いしかわ暮らし情報ひろば」
(iju.ishikawa.jp) (最終閲覧日 2024 年 1 月 6 日)

注 5 「郵便局の地方創生 地域とともに歩む郵便局長～健康マージャン編～」
<http://www.postmasters.jp/action/activity/chiiki14.html> (最終閲覧日 2024 年 1 月 6 日)

注 6 分類にあたっては下記の文献を参考にした。

図司直也「新たななりわいが取り戻す里山の価値と担い手のバトン」(『DePOLA』57 号、
全国過疎地域連盟、2023 年、p.4)

注 7 静岡県湖西市ホームページ 「【2023 年 7 月 3 日スタート！】

近 く で 学 ぶ ! ス マ ホ 操 作 @ 郵 便 局」
https://www.city.kosai.shizuoka.jp/soshikiichiran/joho/gyomuannai/1_1/13129.html
(最終閲覧日 2024 年 2 月 6 日)

注 8 静岡県湖西市ホームページ「企業シャトルバス BaaS (バース) について」
<https://www.city.kosai.shizuoka.jp/soshikiichiran/toshikeikakuka/gyomuannai/koutuu/kigyousyatorubaas/10651.html> (最終閲覧日 2024 年 2 月 6 日)

注 9 「超高齢社会に期待される郵便局のあり方」(総務省 2018 年 5 月 9 日 総務省 郵便
局活性化委員会老テク研究会事務局長 NPO ブロードバンドスクール協会シニアプロジェ
クト担当近藤則子氏報告資料) https://www.soumu.go.jp/main_content/000552133.pdf
(最終閲覧日 2024 年 2 月 6 日)

注 10 姜尚中『悩む力』、2008 年、集英社、p.123

注 11 和歌山県田辺市ホームページ「未来へつながる道 田辺市」
<https://www.city.tanabe.lg.jp/index.html>（最終閲覧日 2024 年 2 月 6 日）

注 12 金子勇「知ってるつもりの郵便局の機能」（『社会学の問題解決力：理論・分析・処方箋』所収）、2018 年、ミネルヴァ書房、p.189

注 13 「『奥川地域づくり協議会』って??」（奥川地域づくり協議会、note.com）（最終閲覧日 2024 年 2 月 6 日）

注 14 「LIFE WITH NISHI-AIZU -西会津のある暮らし相談室-」（nishiaizu-life.com）（最終閲覧日 2024 年 2 月 6 日）

注 15 地域運営組織の先駆けとして著名な広島県安芸高田市川根地区「川根振興協議会」の設立を提唱し、住民合意のとりまとめにあたったのは当時の川根郵便局長であり、協議会の運営に郵便局が関与している。また、郵便局による生活支援システムの先駆けとなった「ひまわりシステム」は、鳥取県智頭町における住民主導のまちづくりの活動の中から誕生したが、リーダーとして取り組みを牽引したのは当時の郵便局長であり、この活動をきっかけに地域振興協議会が設立され「ゼロ分のイチ」むらおこし運動へと展開した。詳細は岡田憲夫「ひまわりシステムを生んだ鳥取県智頭町の地域復興事起こしのまちづくり」（『JP 総研 Research』31 号、2015 年）、坂本誠「人口減少問題と地域社会の維持存続を考えるための視点」（同上）など。

福西地区エリアマネジャー情報

発行：会津若松郵便局駐在
福島県西部地区郵便局支援スタッフ室
電話：0242-22-0842

2023年度 第8号
2023年11月24日
配布先：福島県西部地区連絡会

郵便局(空きスペース)を活用した地方活性化の取り組み ～奥川郵便局と福島大学生との実証実験について～

11/14 (火) 奥川郵便局において「大学生の視点を生かした農山村集落活性化と郵便局との連携可能性に関する実証実験」があるとお聞きし、当日の早朝、奥川局に行き参りました。

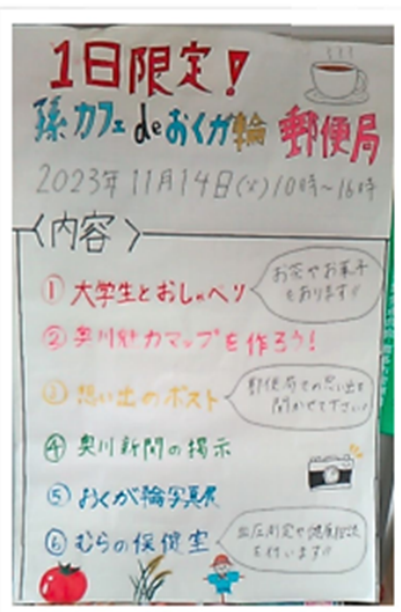


日程 11月14日(火)

午前10時～午後4時頃まで

- 内容
- ・町の保健師さんに参加いただき来局者の
血圧測定や健康診断
 - ・学生が開催する1日カフェ 来局者と
お茶やお菓子を食べながらの交流
 - ・学生が作成した地区の新聞や写真の掲示

参加者 福島大学 岩崎教授
ゼミ生(3年生) 15名程度
西会津町保健師
西会津町集落支援員 2名



エリアマネジャーも混ざって、学生さんと交流を図りました。



他愛のない話から、就活の話へ。

「みんなはどうするの?」「公務員目指しています!(9割の学生)」
「え～郵便局はいないの?!」「・・・(し～ん)」「ゆっ、郵便局の仕事もなかなか面白いんだよ(^^;) かくかくしかじか・・・」

学生さん達は、来局者に「郵便局の思い出」と「奥川の魅力」について、インタビューされており、聞き取りした内容（キーワード的なもの）を付せんにて記入して貼っていました。



「思い出のポスト」より、あるお年を召された方のメモには『郵便局が無くなったら困る・生活ができなくなる』とありました。近々、奥川地域から他の金融機関が撤退することもあり、この地域にとって奥川郵便局はなくてはならない存在だと改めて認識させられました。

郵便局はユニバーサルサービスの維持が法律により義務づけられています。ですので、過疎地域においても郵便局ネットワークは維持され続けているんですね。これは経営上かなり厳しいことだと思いますが、逆に言えば、過疎地においては人口減少の中、最後の『常勤の社員がいる事業拠点』となりつつあると言えますよね。これら拠点には、国営時代から身近な窓口機関として、日々、窓口利用者からの相談や郵便物の配達を通じて、地域住民から顔の見える関係を形成してきたんですね。これはつまり「信頼できる社員（人材）がいる」という郵便局の強みになっていると思いませんか？今回は奥川郵便局で『空きスペースを活用した「農山村活性化」の実証実験』でしたが、郵便局の局舎という物理的な建物が全国津々浦々に設置されているというのは郵便局のストロングポイントです。今後はもしかして、自治体が災害時に備えるため局内の倉庫等を利活用して、備蓄物資（保存食や水等）を保管し、いざという時には郵便局の機動力を生かして、必要な物資を避難所や在宅避難者の自宅へ配送していくことが考えられていくはずですよ。それこそ本実証実験のような「郵便局スペースを活用した取組み」として、高齢者や子育て世代等のサロンやコワーキングスペースとして活用されたり、オンライン診療の拠点として活用余地について検討されていくのかもしれないですね。今回行われた「奥川郵便局と福島大学生との実証実験」を肌で感じて、『近い将来、郵便局は地公体と連携して地域との共生を図りつつ、「公共性」と「企業性」の両立を目指していくんだなあ』という、未来の郵便局が見えたような気がしました。これが地方創生ってことなんですよ。奥川郵便局の皆さま、大変お疲れ様でございました。学生の皆さん、就活頑張ってください！



2023 年度 西会津町奥川地区フィールドワーク 参加学生
(行政政策学類 3 年)

阿部 一輝・伊東 拓真・兼子 唯杜・菅野 史織
桑机 萌々香・斎藤 つぐみ・志賀 翔太・田多羅 瑠貴
寺島 遥香・戸倉 凜乃・西瀬 壮太・藤田 彩希

(行政政策学類 4 年)

吾妻 歩果・安部 景太・安藤 禎基・大越 美里
國分 廣太・小関 誠人・小林 真子・澁谷 奈旺
菅井 花奈・菅原 朋哉・新国 香菜・沼田 健志
三浦 千佳・吉田 優花

指導教員

岩崎由美子 (福島大学行政政策学類教授)

2023 年度大学生の視点を生かした農山村集落活性化と郵便
局との連携可能性に関する調査報告書(2)

—福島県西会津町奥川地区を事例に—

編 集：福島大学岩崎ゼミ

発行日：2024 年 2 月 29 日

連絡先：〒960-1296 福島市金谷川 1 番地

福島大学行政政策学類 岩崎研究室